

三島神社古墳

1972

松山市教育委員会

はじめに

松山市は、道後平野の中央に位置し自然に恵まれ、気候も温暖であるので古くから人が住み栄えたところであります。

春や昔十五万石の城下かな

子規

明治22年市政を施行した後も、小京都といわれるほど美しい自然に満され、多くの名所旧跡のある静かな城下都市ありました。

戦災後の復興はめざましく、四国第一の産業都市として脱皮し、現在人口34万人で50万都市をめざして発展途上にあります。

この数年の土地造成ブームはすさまじく、埋蔵文化財は危機にさらされており、わたくしどもが積極的に文化財を守らなければ、祖先のこした貴重な文化財は、永久にこの世から消滅してしまうのではないかと懸念しております。また一方では、現代や未来のより良き文化発展のためには、開発も必要であり早急な二者択一をせまられる文化財保護行政のむつかしさがあるわけです。開発か保存かで論議された三島神社古墳は、記録保存という消極的な方途しか講じ得なかったことは遺憾なことでありますが、今後は、市民各位のご協力を得て文化財の保護に万全を期する所存であります。

このたびの調査の実施報告の刊行にあたって、献身的に進められた森光晴氏、長井數秋氏ほか調査員や積極的にご協力くださった方々に心から敬意と感謝の意を表する次第であります。

松山市教育長

關谷勝良

序 文

愛媛県の中央都市松山は、埋蔵文化財の多い都市であり、古墳群として確認されるものは、北久米、丸山、北久米山田池、鷹子柳谷、芝ヶ峰、東野馬塚、小野山神、播磨塚、天山、星ノ岡、上野、井関等があげられる。

さらに、この地に縄文、弥生と数多くの埋蔵文化財があるが、戦時中は飛行場に、戦後には食糧増産や果樹園として開墾された。

近年は人口の都市集中による宅地造成、道路建設等で開発され、それに伴う古代文化財、特に埋蔵文化財が破壊される数もおびただしいものがある。

今度の三島神社の古墳もその一つであるが、当市には前方後円墳は少なく、現存するものとしては、経石山古墳（県指定）、波賀部神社古墳（市指定）等があり、戦時に取り除かれた双子塚を合わせても、四基を数える程の貴重な文化財であり、開発のためやむおえないとしても、せめて記録だけでも留めて、後世の研究資料にと昭和46年4月3日から5月9日まで発掘調査を実施した。

古墳の所在する地名を桑原といい、すぐ近くに50番札所繁多寺があり、桑原とハタ寺との関係から「ハタオリ」部の居住地ではなかったか等、今後に残された多くの問題を苦慮しつつ担当者一同調査を進め、それをまとめたのがこの報告書である。

当発掘調査および報告書執筆にあたり、浅学であるわたくしたちに対し各方面からのご指導ご鞭撻をいただきましたことを心より感謝いたしますとともに、この内容等について諸先生方からご指導いただけることを喜びといたしている次第です。

昭和47年11月26日

有りし日の古墳に立ちて

松山市立久米中学校教諭

学芸員 森 光 晴

三島神社古墳発掘報告書

目 次

I 調査にいたるまでの経過	(岸 郁男)	1
II 遺跡の位置と環境	(長井數秋)	1
(1) 遺跡の位置	(タ)	1
(2) 自然環境	(タ)	1
(3) 社会環境	(タ)	2
III 発掘日誌	(大滝雅嗣, 森 光晴)	7
IV 三島神社古墳発掘調査図		12
V 三島神社古墳の墳丘状況	(阪本安光)	13
VI 調査地域の設定	(森 光晴)	15
VII 後円部墳丘における配石および出土遺物について	(森 光晴, 平松康毅)	19
VIII(1) 内部構造	(森, 長井, 平松)	22
(1) 石室の平面	(タ)	22
(2) 石室の床面構造	(タ)	22
(3) 玄室・構造	(タ)	23
(4) 羨道構造	(タ)	23
(5) 羨道閉塞装置	(タ)	24
(6) 排水溝構造	(タ)	24
IX 石室内部の遺物の出土状況	(森 光晴, 長井數秋)	25
X 玄室内部出土遺物	(タ)	30
[1] 玉 簪	(森 光晴, 長井數秋)	30
(1) 管 玉	(タ)	30
(2) 滑石岩製垂飾品	(タ)	30
(3) ガラス丸玉	(タ)	30
(4) ガラス小玉	(タ)	31
(5) 大形白玉	(タ)	31
(6) 小形白玉	(タ)	31
(7) 銀製空玉	(タ)	33
(8) 半鉄形金銅製垂飾品(仮称)	(タ)	33
[2] 鉄器 簪	(タ)	33
(1) 鉄地金銅張金具実測一覧表	(森 光晴)	34
(2) 鉄地金銅張金具	(タ)	34
(3) 排 具(釘)	(タ)	34
(4) 刀 子	(タ)	35
(5) 鉄 鐵	(タ)	35

(6) その他の特殊金具	(森 光晴)	35
(7) 銀 環	(暈)	38
〔3〕 須 惠 器	(大山正風)	38
(1) 石室内出土須恵器	(暈)	38
(2) 石室外出土須恵器	(暈)	38
XI 墓 輪	(森 光晴)	45
〔1〕 墓輪の出土状況	(暈)	45
(1) 円筒墓輪	(暈)	45
(2) 形象墓輪	(暈)	45
XII 墳丘封土の構築	(長井数秋)	53
〔1〕 後円部墳丘封土の構築	(暈)	53
〔2〕 前方部墳丘封土の構築	(暈)	53
XIII 墳丘客土中よりの出土遺物	(暈)	58
〔1〕 楽文時代の遺物	(暈)	59
(1) 楽文式土器	(暈)	59
(2) 石 鐵	(暈)	59
(3) 石 斧	(暈)	59
〔2〕 弥生時代の遺物	(暈)	60
(1) 壺 形 土 器	(暈)	60
(2) 袋 形 土 器	(暈)	60
(3) 土 器 底 部	(暈)	61
XIV 三島神社古墳をめぐるシンポジューム	(暈)	62
XV 結 語	(森 光晴)	66
(1) 墳丘の築造について	(暈)	66
(2) 義道部と墳丘築造との関係	(暈)	66
(3) 墳丘の完成は、第一次として後円部の石室を	(暈)	67

三島神社古墳発掘報告書図面類

Map 1	三島神社古墳付近の地形図と古墳	4	
Map 2	三島神社古墳付近の航空写真	5	
F i g 3	三島神社境内測量図と古墳の位置	阪本 安光	14
※ 4	調査地域設定図	森 光晴	16
※ 5	第二次遺構平・断面図	平松	18
※ 6	墳丘中における配石遺構実測図	阪本, 森 実測	18
※ 7	配石中に伴なった土師器実測図	森	21
※ 8	排水溝平・断面図	平松, 長井	26
※ 9	玄室内部の遺物出土状況図	森	28
※ 10	玉類(ガラス玉, 滑石岩製白玉, 有孔滑石管玉)	長井	32
※ 11	錦 実測 図	森	33
※ 特 1	その他の特殊金具実測図	森	35
※ 12	鉄地金銅張金具実測図	森	36
※ 13	稚具・刀子・鉄轍実測図	森	37
※ 14	銀環・空玉実測図	森	38
※ 15	器台 実測 図	森	40
※ 16	須恵器実測図	大山	41
※ 17の 1	後円部墳丘断面図(石室上部南北センター西壁)	平松, 長井, 一色	42
※ 17の 2	A-2, A-3 西壁Cより(C-C')	平松, 長井	43
	後円部ポイント 東壁(B-B')	タ	43
	C-1~A-1~B-1 北壁(A-A')	タ	43
	A-2~C-2 南壁(D-D')	タ	43
	A-3~C-3 北壁(E'-E)	タ	43
※ 17の 3	後円部墳丘断面図 A-1・2・3 南北	タ	44
※ 18	渠道部の説明①~③ 排水溝西壁・閉塞口・排水溝東壁	タ	44
※ 19	前方部埴輪列実測図	森, 平松	47
※ 20~22	埴 輪 実 測 図	長井, 西条高生	48
※ 23	形象埴輪片実測図	森	49~51
※ 24	N・Oトレンチ断面図	平松, 長井	52
※ 25~27	墳丘客土中よりの出土遺物実測図	長井	56
※ 28	三島神社古墳をめぐる主な古墳実測図(三島神社古墳)	阪本	57
※ 29	タ タ (経石山古墳)	森, 長井, 平松, 岸, 玉井	57
※ 30	タ (波賀部神社古墳)	松岡, 西田栄	58
※ 31	三島神社古墳俯瞰図	実測(平松, 長井, 阪本, 木村, 森) 図 森 別	別
※ 32	三島神社古墳排水溝設備及び渠道玄室内展開図	(全 上)	別

三島神社古墳発掘報告書図版類

掲載の写真は、岸部男、萩野裕、両氏によるものである。

P L 1	排水溝より渠道部を望む	69
タ 2	古 墳 全 景	70
タ 3	台風10号(45年8月20日)直後の前方部西南より	8

P L	4	伐採後南側道路より (46年1月10日)	70
タ	5	グリット (後円部埴丘)	71
タ	6	Oトレンチ (基底部調査)	タ
タ	7	あん部 (Iトレンチ)	タ
タ	8	二次造構の配石	72
タ	9	土師器 (C1グリット出土)	タ
タ	10	二 次 造 構	タ
タ	11	玄室上部配石	73
タ	12	A T グリット天蓋部	73
タ	13	A・B T のグリット発掘状況 Fig 6 の配石造構	タ
タ	14	C - C' 断面	74
タ	15	E - E' 断面	タ
タ	16	G - G' 断面	75
タ	17	G - G' を南面より見る	タ
タ	18	閉 塞 口	76
タ	19	玄室部の天井石 (天蓋石)	タ
タ	20	天井石及び排水溝	77
タ	21	玄室内部よりみた閉塞口	78
タ	22	玄室内部よりみた天井石	タ
タ	23	玄室内部の玉石	79
タ	24	玄室内部の発掘状況	タ
タ	25	落石を除去した床面	80
タ	26	須恵器 (器台) の出土状況	タ
タ	27	ガラス玉出土状況 A1, A2	81
タ	28	鉄器出土状況	82
タ	29	術石製有孔石器の出土状況	タ
タ	36	青銅銀鉈の出土状況	83
タ	31	管玉の出土状況	タ
タ	32	小玉連續状出土状況	84
タ	33	床 面	タ
タ	34	狭道口と排水溝	85
タ	35	排水溝の狭道部分での構造	タ
タ	36	玄室内からみた排水溝	86
タ	37	狭道付近の封土の状況	タ
タ	38	埴輪出土状況 A1, A2	87
タ	39	埴 繩 列 A1, A2, A3	88
タ	40	埴 輪 A1, A2, A3	89~91
タ	41	前方部の封土状況	92
タ	42	玄 室 奥 壁	タ
タ	43	玄 室 右 壁	93
タ	44	玄 室 左 壁	タ
タ	45	玄室内部の割付け	94
タ	46	主体部解体作業	タ
タ	47	消えゆく古墳の最後を見守る調査員 (5月9日17時)	タ
タ	48	器 台	95
タ	49	管 玉 ほ か	タ
タ	50	玉 類	96
タ	51	鉄器類と歯牙	97
タ	52	鉄地金銅張金具 A1, A2	98

I 調査にいたるまでの経過

三島神社古墳は、元三島神社境内地に所在した前方後円墳であり、松山市の文化財史跡に指定されていたものである。

三島神社とその東方約400mにある桑原八幡神社の社殿は、老朽化甚だしく修理不能の状態であった。氏子も同じだったので、これを合祀し新たに社殿を桑原八幡神社境内地に造営することになったが、その財源ねん出に困り、新社殿造営の代價として元三島神社境内を請負業者に無償譲渡するとの契約が昭和43年12月31日付で締結されていたのである。神社側は新社殿竣工間ぎわの昭和45年6月15日になり三島神社古墳の市指定の解除申請書を提出してきた。

市教育委員会は、三島神社側と古墳部分だけでも保存するように再三話を進めたが、神社には代替地を提供する資力もなく、營利を目的とする会社側に協力を求めるることは不可能であった。

文化財専門委員会の答申により古墳を保存すべく児童公園など多目的の公有地化、あるいは最小限度の市費買収も検討したが隣接地など2,000m²必要であり、すでに第三者の手に渡った後では買収はできなかった。

昭和46年1月下旬になり当該地の立木の伐採を終った共和産業株式会社が、整地工事をはじめることを察知したので、その施工を重ねて延期するよう要請した。

一方破壊されることが目前に迫っている現状であったので、1月28日文化財の指定を解除し、学術的に充分な調査をするため2月10日発掘届を提出し、3月15日付で文化庁の承認があったので、4月3日から発掘調査を実施した。

II 遺跡の位置と環境

〔1〕遺跡の位置

三島神社古墳の絶対位置は、東経132°47'56"、北緯33°49'37"の交差する地域である。行政的位置は、愛媛県松山市畠寺町269番地である。

〔2〕自然環境

四国山脈から瀬戸内海に向って北に突出する高龜半島の西部に水源を發する石手川は、南西方向に流出し、下流で重信川に合流して西瀬戸内海の伊予灘に流入している。

石手川の左岸には杉立山(669m)から芝ヶ崎山(282m)に連なる分岐山塊が存在する。この山塊の西山麓に続く舌状の洪積台地であるお茶屋台地上の一端に、三島神社古墳は立地している。

この山麓に続く低位のお茶屋台地は、石手川の一支流である川附川の開折作用により、ほゞ南北に浅い開折谷が形成されつつある。この浅い開折谷から取り残された洪積台地の先端は、更に二つの舌状台地となっている。その東部に位置する舌状台地の先端部の微高地を利用し、当古墳は築造されている。三島神社古墳の西側の浅い開折谷を隔てた台地先端部にも、ほゞ同規模の前方後円墳である経石山古墳が分布している。

三島神社古墳の墳丘上からは、松山平野のそのほとんどが瞭望できる眺望の豊かな場所である。特に南方約1.5kmの地域には大山(52m)、東山(53m)、星岡山(75m)が、さらに西方3kmには松山城の存在する勝山(132m)の和泉砂岩層からなる分離独立丘陵が指呼の間にある。

舌状に突出するがごとき状態で残存する洪積台地であるお茶屋台地は、和泉砂岩を基盤に一部花崗岩が混入した地層から形成されている。さらにその上部に、黒色火山灰土層(黒色ローム層)が堆積している。この黒色ローム層は、舌状台地の先端部においてはほとんど認められない。これは長年月の雨水の浸食作用によって、浅い開折谷に流出したものと解される。古墳の存在する舌状台地の西側に開けた浅い開折谷には、台地上から流入した黒色ローム層が堆積し低湿地となっている。舌状台地の南部も、黒色ローム層の堆積した低湿地となっている。

三島神社古墳の存在するお茶屋台地は、洪積台地なるがゆえに、水利の便が悪く、したがって水田耕作には不適となり、かっては桑園として利用されていたが、その後普通畠となり、現在では松山市の都市化の波が押し寄せ、新興の住宅地と化している。

なお、三島神社古墳の立地するお茶屋台地の地質については若干前述したが、古墳の主体部をなす石室、ならびに付属施設に用いられている石材の搬入経路等を考察するうえから、今少し補足したい。

洪積台地からなるお茶屋台地は、前述のごとく和泉砂岩層より形成されているが、この台地の北端を流れる石手川以北は、花崗岩層からなっている。それゆえ、その両地層の接触地帯を流れる石手川には、和泉砂岩や花崗岩の河原石が存在する。お茶屋台地上に一部花崗岩が混入しているのも、かっての石手川の運搬作用に他ならない。

和泉砂岩層は南11kmの地帯を東西に走行する中央構造線まで続いており、お茶屋台地上には、和泉砂岩、花崗岩以外の岩石類は自然状態のもとでは存在しない。中央構造線以南は三波川層に属し、縁片岩類が存在する。しかし、河川の浸食、運搬作用により、当古墳の南5kmの松山平野を東西に貫流する重信川には一部縁片岩類の河原石が存在する。

(3) 社会環境

松山平野をはぐ東西に貫流する重信川、石手川の形成した沖積平野に面する山麓ないしはその周辺部には、縄文時代から弥生時代、さらに古墳時代にかけての遺跡が夥しく分布している。それらをすべて網羅し、説明することは困難であり、かつまた、それらすべてが三島神社古墳と直接関係を有するものでないので省略したい。

ここでは、地域的には、三島神社古墳の立地する周辺部に、時代的には三島神社古墳の築造された時期の前後に限定して触れるに留めたい。

弥生後期の遺跡は、松山平野北方の御幸山麓から東部の東野の山麓、ならびに勝山周辺部の沖積面には数多く分布している。特に三島神社古墳の立地するお茶屋台地の北部の丘陵上には、大規模な弥生時代の遺跡群が、古墳群とともに混在している。三島神社古墳の西方400mの舌状台地の先端部には、前述のごとくは、同規模で同時期かや、先行するとみられる経石山古墳がある。地形的には三島神社古墳も経石山古墳も洪積台地に立地しており、お茶屋台地群の中に包括されるものとみなすことができよう。

続いて南至近距離にある畠田、北野を中心とする北久米の洪積台地上にも数基の前方後円墳が存在していたといわれているが、現在では水田ないしは溝池築造によって崩壊してしまい、その一部が遺存しているに過ぎない状態である。これに続く南久米から鷹子、北窪田にかけても古墳が数多く分布している。さらに石手川の一支流である小野川の開拓した平井谷や今吉の山麓一帯には、今吉古墳群がある。なお、今吉古墳群と有機的な係わりを有するとみられる芝ヶ崎一帯（海拔150～280m）の山頂には芝ヶ崎古墳群がある。今吉古墳群から東へ、山麓ないしは洪積台地に沿って北梅本古墳群、播磨塚を中心とする南梅本古墳群が延々と続いている。これらは平井谷の方墳を例外とすれば、そのほとんどが円墳である。この中には円筒埴輪や人物、動物、家形埴輪が出土したものもある。

これら古墳の内部構造等については、その発見がいずれも農耕中に偶然発見されたものであり、正式な調査がおこなわれたのが皆無に近い状況であることから定かなことは判明しない。これらについては未調査のものと併せて今後の研究に待たい。

他方、南2km隔てた小野川、川附川の合流する低湿地に存在する和泉砂岩の分離独立丘陵である天山、東山、星岡山には、弥生時代の遺跡とともに多くの堅穴式や横穴式の円墳が多く分布している。特に天山は『伊予風土記逸文』にもその名がみられる丘陵であるが、かつて水鳥とみられる線刻画のある石室があったといわれるし、最近では鉄劍や銘文帶五神五獸五龜鏡が出土している。

三島神社古墳は、墳丘構造上からは前方後円墳である。それゆえ、松山平野北東部の山麓地帯に立地する前方後円墳とみられるものの分布について触れておきたい。

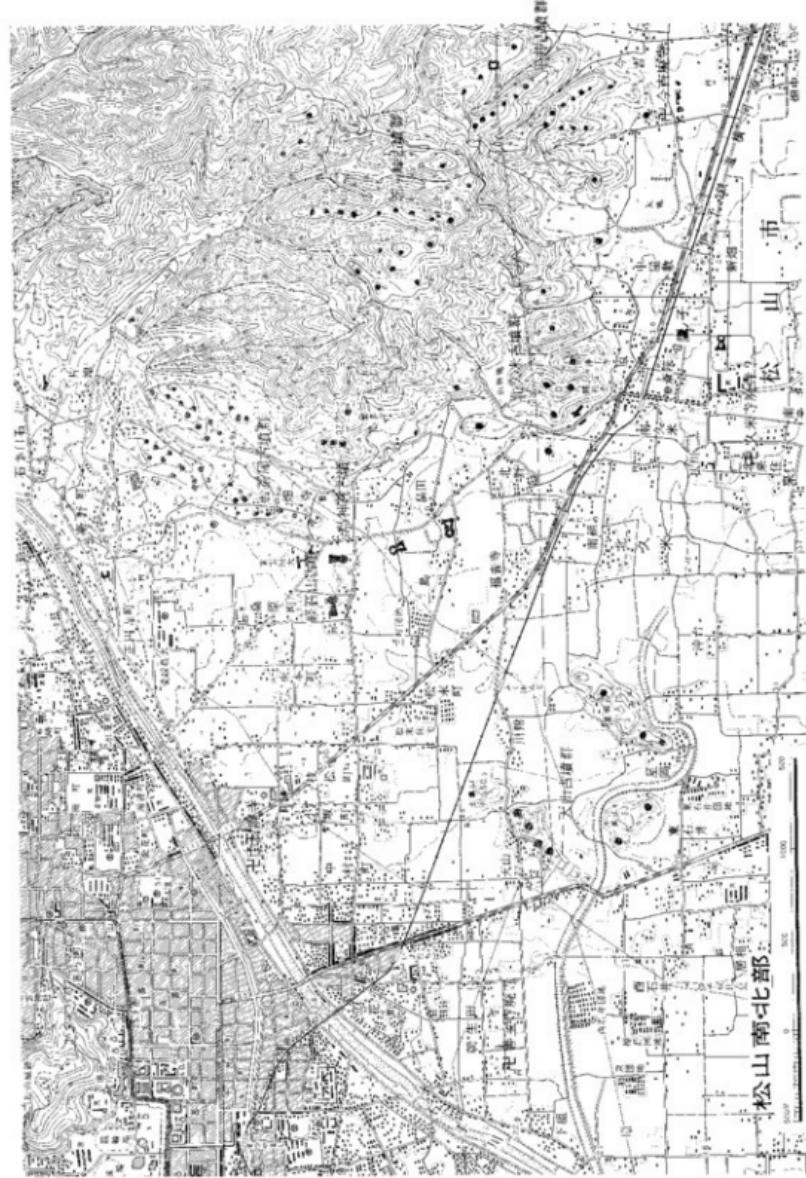
松山平野の別辺山麓部に分布する古墳は大半が円墳であり、前方後円墳は前述の古墳群中のすべてに分布するというような傾向は認められない。前方後円墳は、石手川の北部と南部の山頂ないしは丘陵上に比較的多く集中している。すなわち、石手川を隔てた道後丘陵である桜谷山の桜谷古墳、それに当古墳と西方400mの経石山古墳、さらに畠田から北野にかけて3～4基の前方後円墳が存在したといわれている。これら3～4基の古墳は一部が遺存するも、そのほとんどが消滅してしまっているので定かではない。加えるに久米中学校敷地付近には規模の大きな前方後円墳があったが、戦時中の滑走路建設に伴なって消滅し、その痕跡すら留めていない。

さらにこの久米より1.5km南東の松山市高井の沖積平野上に波賀部神社古墳がある。この波賀部神社古墳は、横穴式石室を有していたといわれている。

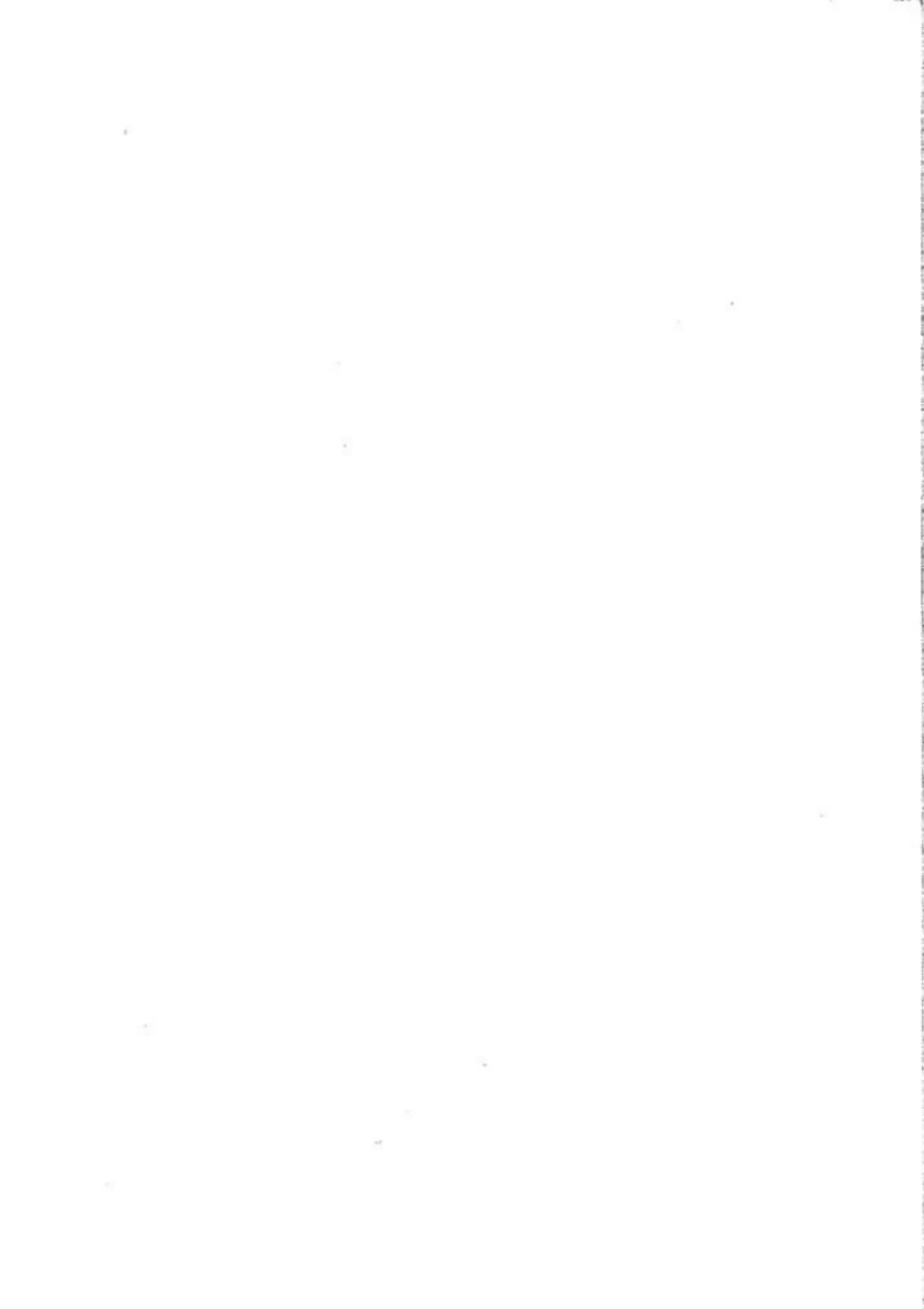
これら、以上の前方後円墳のうち正式な調査が実施されたのは皆無である。たゞ桜谷古墳のみが若干その出土状況が知られているに過ぎない。墳丘の計測のおこなわれたものも、三島神社古墳以外では桜谷古墳と経石山古墳をあげるに留まる。これらの古墳の時期も、現在までの段階では明らかとなっていない。

経石山古墳と三島神社古墳とは墳丘の形態からの観察結果として、先学者が前期の様式を持つ古墳であるとしているが、三島神社古墳の発掘によって、これが後期に属するものであることが明らかとなったことから、墳丘の形態的観察のみから時期を云々することは差し控えたい。

Map 1 三島神社古墳付近の地形図と古墳







III 発掘日誌

4月 3日 (土) 晴 12.3° 風向 NW 風力 3.8 開始8時30分～終了17時00分
8時30分、三島神社古墳発掘関係者現地に到着。9時より石丸神官により神事を擧行する。

4月 4日 (日) 晴 13.7° 風向 SSW 風力 5.8 開始8時30分～終了17時00分
一班は墳丘周辺地の測量を行ない、二班は墳丘の封土の状態について調査を終日おこなう。

4月 5日 (月) 晴 15.4° 風向 SSE 風力 6 開始10時00分～終了18時00分
後円部墳丘上にそれぞれA・B・Cのグリットを設定し、後日BグリットはBトレンチと延長するように設定した。それぞれのグリットは、Bを基準に2m巾で区画し、A-1, A-2, A-3, B-1, B-2, Bトレンチの左側に前方部に向けてC-1, C-2とした。A-1 A-3, B-2より-10cmの地点で礫岩の出土をみた。11時40分作業中止し写真撮影を行なう。13時作業開始、A-1, A-2, C-2より須恵器の土器片の出土をみる。作業終了17時、終了後実測図と遺物処理についてミーティングをする。

4月 6日 (火) 晴のち雨 14.2° 風向 NNE 風力 5.2 開始9時00分～終了18時00分
坂本調査員により墳丘部の等高線25cmによる再測量をおこなう。

4月 7日 (水) 晴 13.7° 風向 SW 風力 5.3 開始8時30分～終了18時30分
各グリットの掘り下げを行なう。-30cm地点で第二次的遺構らしきものを発見した。一班は桑原病院前の三角点を基点にして墳丘頂の測定に向う。

4月 8日 (木) 曇 15.7° 風向 NW
風力 5.2 開始13時30分～終了18時30分
保護と開発をテーマにしての現地レポが行なわれ、作業ははかどらず。午後7時より関係者、一同に集まり発掘計画について協議会をもつ。可能な限りの時間をかけて発掘調査をおこなうとで意見の一致を見る。

4月 9日 (金) 曇時々雨 12.3° 風向 SW
風力 6.2 雨天のため作業中止

西田栄教授の現地視察を行う。西田教授より市に対し保護を強調される。

4月10日 (土) 晴 9.5° 風向 W 風力 5.3 開始8時30分～終了19時00分
くびれ部に2m巾のトレンチを設定、-15cmの地点より土師の埴輪片を12点発見。さらに墳頂より3.5mの地点でこぶし大の河原石(礫岩)3個を発見するが埴輪の敷石とは断定出来ない。周溝の確認のためさらによく延長し明日にたくす。

くびれ部のトレンチに対して交差角40°で前方部後長にむけてトレンチを設定した。設定理由は昨夜らしい雨により須恵質の埴輪片の発見をみたことがある。



4月11日（日）晴 11° 風向 SW 風力 5.0 開始8時30分～終了18時30分
くびれ部のIIトレンチの発掘調査とAトレンチを後円部墳頂より10m後方に延長し発掘調査をおこなう。

グリット調査班は-40cmの深度においてA-2, C-2で粘土を確認する。

4月12日（月）晴 12.7° 風向 NW 風力 5.0 開始8時30分～終了20時00分
くびれ部の埴輪片の実測の後、周溝をもたないことも確認した。これにより発掘を前方部に拡大した。Kトレンチを巾1m、長さ14mで設定しATとの交差角40°、Nトレンチは巾2m長さ10mでATと交差角度60°、Pトレンチを前方部の基準点よりATに平行に巾2m、長さ6mで設定した。各トレンチともに-50cmでの遺物の発見はなかった。

4月13日（火）晴 15.9° 風向WNW 風力 5.5 開始9時00分～終了18時30分
KT, LT, NTの各調査を進めると同時にA, B, Cの各グリットでの調査もおこなう。A-2 B-2において、粘土層の周溝の探索をおこなう。B-1のグリットより-50cmで上層器の発見をみる。

4月14日（水）曇 17.1° 風向WNW 風力 5.0 開始9時20分～終了19時10分
後円部のA, Bグリットをそれぞれ前方部に向け、Aトレンチ、Bトレンチとして延長し調査を進める。

前方部KT, LT, NTの調査も進める。特にNTを兆域にまで延長した。

後円部においては、グリット内の周溝の探索をおこなう。粘土層を想定し慎重に掘り進めたが、深度-80cmにおいても粘土層との確認はできなかった。

4月15日（木）曇 15.7° 風向WNW 風力 2.8 開始8時30分～終了19時00分
AT, BTの延長部の発掘をおこなう。AT-14, BT-14, BT-15の各グリットの-50～-75cmにて埴輪片の集中的な出土をみる。出土状況は、前方部前縁に平行的にみられた。さらにLTとBTの間を結び表高-3m付近を発掘した結果、-50～-70cmの地点で埴輪の集的な出土をみる。出土状況から埴輪列であることを確認した。

4月16日（金）曇一時雨 14.9° 風向WNW 風力 3.7 開始10時00分～終了18時00分
AT-14, BT-14をそれぞれ、棱線トレンチのPTまで延長し発掘をする。11時30分頃、円筒埴輪列を発見した。

後円部墳頂の粘土層の想定は、第二次的造構として測量を実施する。

4月17日（土）曇のち雨 12.0° 風向 N 風力 5.5 開始9時00分～終了18時00分
前方部前縁の埴輪列の確認をする。合計23個体の円筒埴輪を確認、須恵器質に近い埴輪も確認した。実測と採集をおこなう。

後円部の粘土層は粘土塊として取り扱うこととした。

4月18日（日）晴 12.3° 風向 NE 風力 5.7 開始8時30分～終了22時00分
前方部の埴輪の残部5個を採集。内復元可能なものの数個あり。

後円部墳頂における、発掘以来の粘土層との想定をあらため、思い切って各グリットを-110cmの地点まで掘り下げる。この地点においてA-1, A-2, C-2の各グリットに礫岩の配石をみる。さらにブロック状の地層をもってB-2を-100cmまで発掘をおこなう。この発掘により

A-2, B-2におちこみを発見したこと、A-1, A-2, C-1, C-2のセクション面に粘土を混入したブロック層が深度70~80cmの層にあること、さらにA-1, C-1のセクションに半円型のブロック層の確認をしたことにより、石室構築の可能性を見い出した。

本日より宅地造成者のブルトーザーの作業が周辺でおこなわれた。

西田栄教授の現地視察をうける。西田教授より市に対し保護を強調される。

4月19日（月）晴 12.4° 風向 N NW 風力 4.2 開始 8時30分～終了24時15分

昨日に続き、後円部の再度掘り下げをおこなう。その結果21時19分A-2グリットの一2.5mにおいて石室部の石蓋を発見するにいたる。本日遠巡する心をおさえ思いきった作業の結果主体部の発見に到る。発掘調査員全員、従来の想定を反省し今後の発掘作業のための再構成をおこなう。先日來の作業の混迷状態から脱し得たという安堵感と今後の作業における外野の憶測、報道関係者対策にまつわる困難について思いをはせ、一同放心状態に陥入る。なにはともあれ、石蓋発見を祝って祝宴をあげ、明日からの発掘計画について話し合う。

なお愛大農学部に墳丘部の土壤分析を依頼する。

4月20日（火）晴 13.6° 風向 WNW 風力 4 開始 8時00分～終了23時00分

墳丘の関係からB-1, B-2にも石室を想定してそれぞれセクションベルトを残して掘り下げた。本日横穴式石室であることを確認した。一方ATを後方に延長し兆域の確認調査をおこない、完了と同時に宅地造成作業にかかった。

19時漢道部（排水溝）の入口を発見した。

4月21日（水）晴時々曇 14.3° 風向 NW 風力 3.8 開始 8時30分～終了17時00分

森主任出張のため、24日まで長井氏主任代行として発掘を担当する。漢道部と排水溝の発掘を終日おこなう。

4月22日（木）晴時々曇 14.3° 風向 NW 風力 3.8 開始 8時30分～終了17時00分
前方部のAT, BTの発掘作業を終日おこなう。

4月23日（金）晴 17.2° 風向 WSW 風力 3.7 開始 8時30分～終了17時00分
前日に引き続き前方部のAT, BTの調査と遺物の整理

4月24日（土）晴 17.9° 風向 WNW 風力 3.7 開始 8時30分～終了18時30分
石蓋部の清掃及び漢道部の清掃をおこなう。明日よりの発掘準備をする。

4月25日（日）晴時々曇 17.5° 風向 SSW 風力 4.7 開始 8時30分～終了21時10分
B-2の掘り下げ、陪葬の調査と前方部のセクション調査と主体部の蓋石上のセクションの排除をおこない、天蓋部の実測をおこなう。午後高松より松本氏来松、石室内の点検を受け指導をあおぐ、内部調査により、片袖式横穴で、天井石は7枚であり、奥ゆき2.65m、巾1.6m程度で、アーチ型の穹窿型石室であり、壁面にベンガラ塗装のおこなわれていることを確認した。

B-2の掘り下げは-2mまでおこなう。陪葬はおこなわれていないことを確認した。

4月26日（月）晴後曇 15.6° 風向 SSW 風力 5.8 開始 8時30分～終了22時00分

本日より主体部の本格的調査をおこなう。玄室内の土砂の堆積状況から最近に擾乱されていることを確認した。二次堆積土中より縄文後～晩期の土器片を発見する。土砂の堆積は平均して20cm内外であった。床面には玉砂利をしきつめている。

4月27日（火）晴 18.0° 風向 NW 風力 4.7 開始 8時30分～終了23時00分

玄室内の発掘調査と羨道部排水溝の調査に重点をおく、玄室内部の出土遺物は実に少なく、落石の下より器台の破片を発見したにとどまった。

午後玉石の除去作業にとりかかる、16時30分玄室内中央部西壁面より60cm、-15cmの地点でガラス玉を発見する。ガラス玉の集中的な出土をみるとともに環状に分布したガラス玉の発見に到る。21時30分より玄室内床面の測量と写真撮影をおこなう。出土遺物はガラス玉990個、須恵器片30片を採集する。一方羨道部の排水溝の完全な露出を見た。玄室の塗料はベンガラであると山本教授より連絡あり、又墳丘の黒色土壌は愛大農学部にて分析の結果、火山灰土である旨の連絡をうけた。

4月28日（水）曇時々雨 12.7° 風向 ESE 風力 12.9 開始 8時30分～終了29日2時

昨日に引き続き終日玄室の調査をおこなう。-17cmで管玉、鈴、鉄片、青銅器片を発見した。写真、平板、実測と実に忙がしくなった。14時過ぎ雨のため作業を中止し墳丘にテントをはる。鏡、刀等の出土を期待したが、本日までの作業では発見できなかった。

4月29日（水）曇時々雨 14.5° 風向 WSW 風力 6 開始 10時00分～終了21時00分

昨日につづき玄室調査、-40cmで基底部に到る。床面の調査のため、50×100cmの-80cmまで掘りさげる。床面にや、円形にガラス玉の出土をみた以外には遺物なし。

4月30日（金）晴 14.1° 風向 NW

風力 6 開始 8時30分～終了18時00分

床面の調査のためにさらに2か所トレンチをいた。玄室内部の出土物が極度に少ないため、さらに入念に副葬品の調査をおこなう一方、玄室内、排水溝の実測をいそぐ、宅地造成者との話し合いにより5月10日まで作業延長を了承される。一同歓喜する。

5月1日（土）晴 13.1° 風向 WNW

風力 5 開始 8時30分～終了18時00分

午前中前方部埴輪列の部分のセクションを取る。後円部では羨道部の閉塞口を完全に露出、写真撮影、西田栄教授の指導をうける。



- 5月2日（日）曇 17.2° 風向 SW 風力 4.5 開始8時30分～終了23時00分
前方部のセクションと玄室内部の実測をおこなう。
- 5月3日（月）暴一時雨 19.4° 風向WNW 風力 4.5 開始6時30分～終了18時00分
羨道部排水溝の実測、玄室内壁面の割付にかかる。午後墳丘上にやぐらを組み天蓋と排水溝の写真撮影をおこなう。
- 5月4日（火）雨後曇 16.2° 風向 S 風力 7.2 開始9時00分～終了5日4時
玄室内壁面の写真撮影と実測をする。
- 5月5日（水）曇時々晴 13.4° 風向 N 風力 4.5 開始8時30分～終了6日3時
玄室内実測。宅地造成業者によりブルドーザーであん部切断される。羨道部の閉塞石と基底部の玉石を桑原神社へ移送した。
- 5月6日（木）曇 13.2° 風向WSW 風力 3.2 開始8時30分～終了18時00分
前方部の断面をショベルカーとブルドーザーで出し、カラー写真撮影、実測をおこない、盤築の様子が判明した。石室部分だけでも保存方を要請したができなかった。
- 5月7日（金）晴 15.2° 風向 SE 風力 5.0 開始8時30分～終了19時00分
ブルドーザーによる墳丘の崩壊作業に立ち合う。午後石室内の石に番号を書く。
- 5月8日（土）晴 15.8° 風向WNW 風力 6.3 開始13時00分～終了17時00分
資材搬出。
- 5月9日（日）晴 15.8° 風向 NW 風力 4.3 開始8時00分～終了17時00分
石室を解体し、桑原神社への移送が終ると同時に、ブルドーザーで整地がおこなわれ、見守る調査員の胸のうちは感無量であった。



復原にそなえ解体搬出作業
を北（奥壁側）より撮影

IV 三島神社古墳発掘調査団

調査団長	仙波 光三 (松山市教育長)
調査副団長	西原多喜男 (松山市学校教育課長) タ
	松本 清 (松山市社会教育課長)
調査主任	森 光晴 (松山市立久米中学校教諭)
調査副主任	長井 敏秋 (松山南高等学校教諭)
調査員	八木 繁一 (松山市文化財専門委員長) タ 野口 光敏 (愛媛県文化財専門委員) タ 柳原多美雄 (松山市文化財専門委員) タ 山本 四郎 (タ) タ 阪本 安光 (松山市立御幸中学校教諭) タ 宮本 満幸 (タ 鴨川中 タ) タ 大滝 雅嗣 (タ 久谷中 タ) タ 堀川 春夫 (愛媛県教育センター) タ 平松 康毅 大山 正風 (温泉郡川内中学校教諭)
事務局長	谷川 敏一 (松山市社会教育課長補佐)
経理主任	池内 厚一 (タ 庶務係長)
庶務主任	八倉 茂 (タ 成人教育係長)
現地主任	岸 郁男 (タ 文化係長)
補助員	宇佐美繁晴 菅 忠博 神野 俊彦 以上 (西条農業高校) 赤松 敏弘 岡 芳樹 池野 宏志 泉 伸治 植口 栄一 菊池 隆和 片山 淳 言金 吾朗 上川 清 (以上御幸中学校) 仙波 五月 川田 愛 (以上久米中学校) 松友 梓一 八束 要 田中 幸尚 志村 只夫 三好 俊彦 熊田 哲也 原 稔 江戸 孝 三神 弘平 黒川 正美 上岐 務 脇田 勝 室地 潤 加藤圭一郎 前川 昌義 萩野 裕 深穴 貞男 森 和朋 金子 晴忠 港 準之助 中矢完三郎 仙波 満夫 渡部 勝利 赤星 忠男 久野 完 河内 功 相原 秀行 鳴屋 幸男 玉井 常男 是沢 誠 山口 健介 佃 和夫 今村 正男 田内 幸男 立石 久 大下 新二 野中 修 西尾 幸則 本田 孝男 藤井 康夫 長野 成敏 重松 良基 山地 昇 一色 正士 大野 省三 円下 正勝 仙波 健一 義野 謙 一色 清宣 足立 茂 吉野 総司 河口 雄三 亀山 福正 山本 勇 西間 宏志 (以上教育委員会) 木村 利仁 (宇和島營林署)

V 三島神社古墳の墳丘状況

1. 三島神社古墳の墳丘比高

測量を担当する関係者が、松山市全域の地図を中心にどの三角点から実測するかについて検討した結果、松山市桑原町と樽味町の2ヶ所に、三角点のあることを確認。一応樽味町の三角点を原点として実測を行ない、桑原町の三角点までを実測して測量技術を再確認しようではないか、という話し合いから、1,293.5m離れた地点（墳丘から北西に当る）の三角点、標高41.69mを原点として実測にある。

桑原町の三角点、標高42.12m、その間の距離約950mで0.02mの誤差をみたので、この点をさらに原点にかえ、墳丘までを慎重に実測した結果40.20mの標高であることを測定した。しかし、樹木伐採後、盛り土がかなり流失したと考えられるので当時の墳丘高との誤差はかなりあると思われる。

2. 三島神社古墳と経石山古墳

三島神社古墳（N23.5W）から西北西の地点にある、経石山古墳（W 0.20°N）も前方後円墳である。現在、松の巨木と雑木が生い繁っている。標高41.20mと三島神社古墳より高く、古いものであると言われている。当古墳間の距離は279.30mである。この地域一帯には、ほぼ当間隔で多数の古墳がみられる。

3. 三島神社古墳の社域と墳丘

市道と水田に囲まれた、楕円形の小高い丘を思わせる地形である。社域総面積5,557.5m²で社域の東部を占める墳丘は、次ページ図のごとく、三島神社建立の際、一部分を切り取り、残った部分が神社裏に屏風を思わせる形で現存していた。

現存していた墳丘面積 380m² 予想される原形墳丘面積 593.5m²

三島神社建立のため切り取った部分の面積 213.5m²

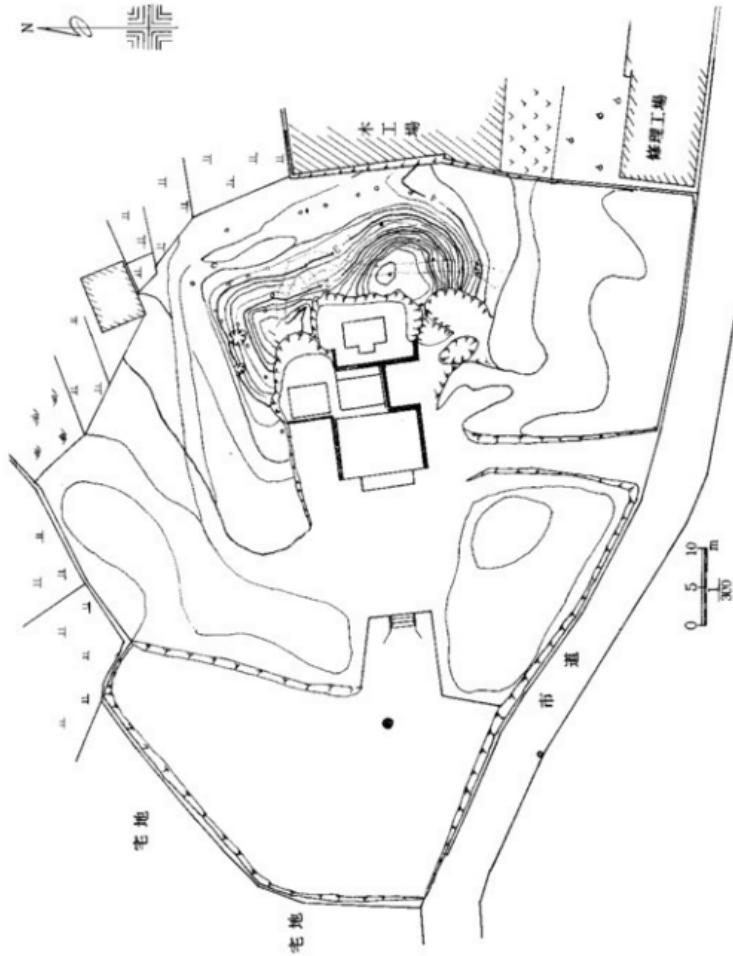
社域全体の約1割を占める墳丘となっていた。

4. 三島神社古墳の盛り土状況

前方部と後円部の盛り土の土質については、かなりの違いがみられ、詳細については後述するが、前方部には、近くで取った土質と思われる黄褐色粘土質のものに、暗褐色土質（火山灰土）の混ったものが多く使われており、後円部の石室の廻りは黄褐色粘土質と思われるものが使われていた。

予想される原形墳丘面積および現存していた盛り土の量から判断すると1,500m³～1,600m³程度の盛り土がなされていたのではないかと推定される。従って盛り土作業に従事したと推定される延人数も3,000人～3,500人役と考えられる。当時100人の人々が働いたとしても30日～40日の日数を要する事になるが、現在のように機械の発達した時代と異なり、人力にたよる時代で、作業用の工具にしても、非能率的なものであったと推定されるだけに予想以上の違いもあると考えられる。

Fig. 3 三島神社境内測量図と古墳の位置



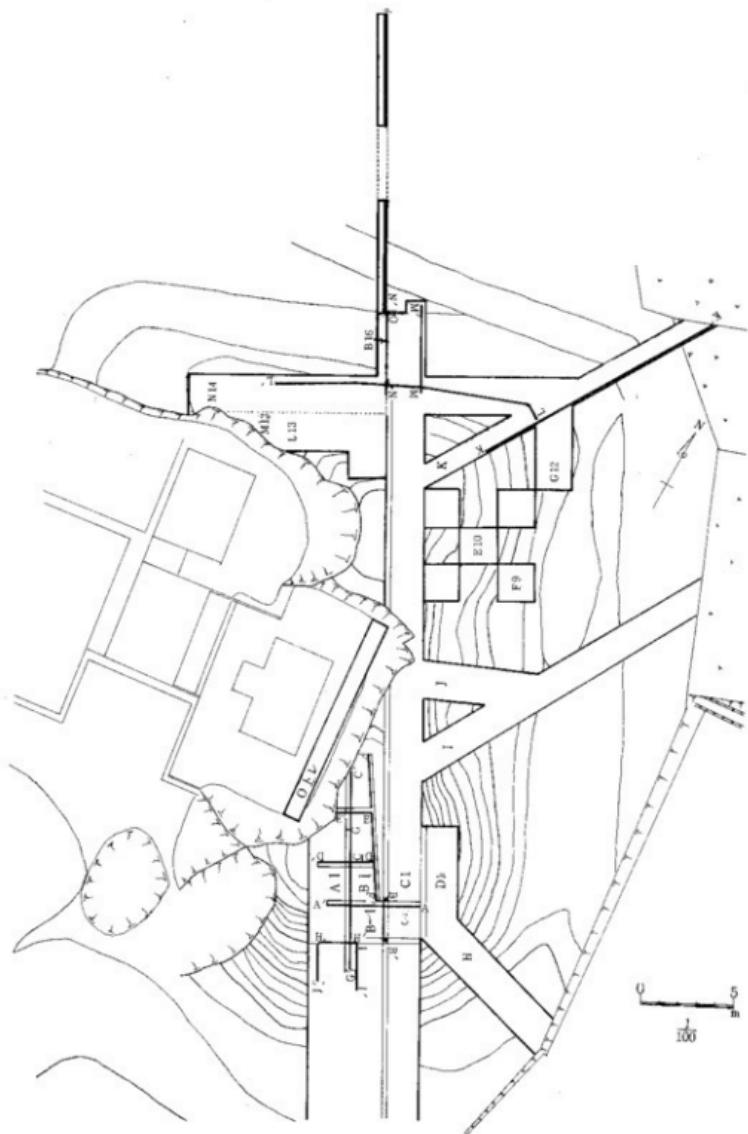
VI 調査地域の設定

Fig.4で示すように、A.TrenchからO.Trenchまでの調査地域を設定した。

調査地域設定の意図

- 1, O.Trenchは、墳丘の基盤調査のためで、すでに旧三島神社本殿跡として削除されているが、墳丘の破損をみず調査可能なため、次後の調査への手がかりとして実施し、墳丘の削除された斜面の調査もかねておこなった。
 - 2, A.Trenchは、本古墳の主軸に対して、センターとしてのトレンチ設定とした。
 - 3, B・C.Trenchは、かねてより本遺跡が早期の古墳ではとの説もあり、調査担当者として当然早期の古墳なることを想定して、A・B・C.Trenchにおいて、それぞれ、後円部の墳頂部において、2m²のグリット方法による調査区域を設定し、粘土層であるやも知れないと入念に調査をした。その後横穴式石室なることを確認したことにより、後円部の遺構調査のため延長し、特に排水溝等の出現もあり、各トレンチともども延長した。さらにA.Trenchを前方部に延長したことは言うまでもない。
 - 4, D・H.Trenchについては、Dにおいて陪葬があるやも知れないと推測により調査をした。後述の如く、玄室内での出土遺物も極少なため、特に設定したトレンチもある。HについてはAの延長部と同目的である。
 - 5, I.Trenchはくびれ部の調査を目的としたことと同時に、社域までの延長をし、可能な範囲の周溝の調査をこころみた。
 - 6, J.Trenchは、表面採集により、須恵器質の埴輪片を探集したことにより調査をした。
 - 7, K.Trenchは、前方部の陵線の封土の調査と前方部周溝の調査を目的とした。
 - 8, N.Trenchは、C.Trenchの延長により発見した墳丘の封土中よりの埴輪片の集中的な出土地点を中心に、ほど東西にトレンチを設定し、前方部延長上にわたって調査し埴輪列の確認と合わせ、その遺構の調査をした。
 - 9, M・L.Trenchは、前方部におけるN.Trenchの埴輪列が同心円状に配置されているかについて調査をした。
 - 10, G.Trenchは、N.Trenchの延長として考えられる調査区で、埴輪列の確認のために設定した。
 - 11, E・F.Trenchは、前方部における埋葬設備の確認のために調査区を設定したが、それらしき兆候がみられなかったことと、作業日程の上からグリットをくみ図のごとき調査を実施したことにある。
- 以上のように各調査区域を設定したことの他、本遺跡は宅地造成のための全壌が必至であるため、特に調査の最終的な段階において、A.Trenchに平行してブルドーザーによる盛土の状態を調査できたことは発掘担当者として一つの新しい資料提出になることをよろこびとしている。

Fig 4 調査地域設定図



第二 次 遺構

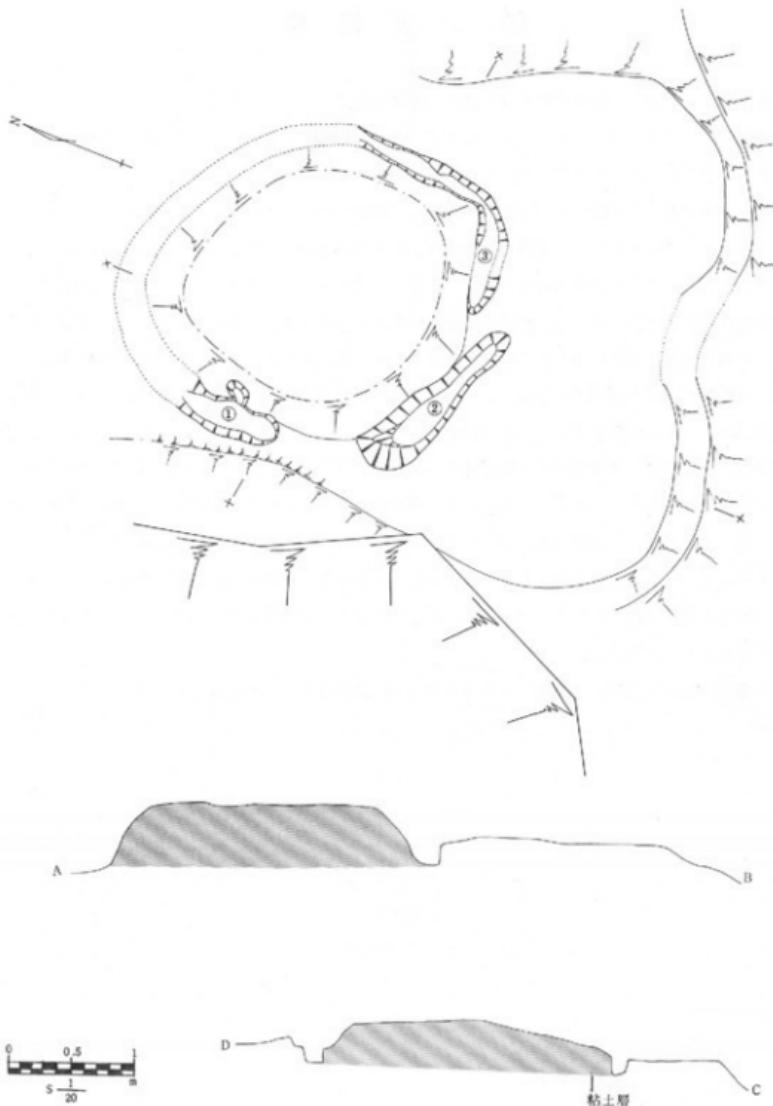
断面が台形を呈した褐色の粘土塊の廻りに周溝を施設したものである。

遺構は、A-3, B-2, 3・4, C-2・3・4の各区にわたって発見され、その中心部はB-3区であった。したがって、後円部墳丘の中央よりや、北東に位置している。

B-3区の表土下30cmにおいて粘土が露呈し、遺構の存在が予測されたのは4月7日であった。その後、全貌を現わした遺構の計測値は、粘土塊の上部で南北230cm、東西270cmを測定した。しかし、プランの最大径はSE～NW方向に読みとれ、このことから同方向を長軸とするいわゆる卵形を呈している。断面がほぼ台形であることはすでに書いた。すなわち、前者(南北)が高さ65cm、後者は中央部で屈折して最大50cm、最小20cmを計測した。現存する周溝は三溝に分離され、粘土塊の下部と同一レベルで平面の $\frac{1}{2}$ 強を囲繞している。①は幅30～40cm、外壁高15cm、一部に擾乱があった。②は独立溝の形態をとっている。幅は最大50cm、最小25cm、外壁高20cm、長軸の東南部約 $\frac{1}{2}$ が粘土塊から隔離している。③は幅20～30cm、外壁高15cmである。溝底はいずれも平坦であり、厚さ約1.5cmの乳白色の良質粘土で壁面および溝底を被覆している。②は幸運にも完掘されたが、①と③は上部の粘土塊の流土によって完掘しえなかった。したがって、「①と③は連結されて一溝となる」「①と③はおのおの独立溝の形態をとる」また「①と③は独立溝の形態をとり、あらたに②に対抗する独立溝が存在した」以上、三説が導きだされるものと考える。

本遺構は発見の頭より完掘にいたるまで、文化遺物はまったく検出されなかった。

Fig 5 第二次遺構平・断面図



VII 後円部墳丘における配石および出土遺物について

第二次遺構において述べたように、後円部墳丘の中央部より、や・北東に台形の粘土塊を発見したが、この遺構からは遺物の出土は皆無であった。その西、すなわちA-2のグリットにおいて、粘土塊とほぼ同一深度において和泉砂岩の自然石を環状に配石した遺構を発見した。

配石面はそれぞれ-52cmに整えられていた。調整されていることにより明らかに意図的なものであろう。またその配石の下にさらに5個の自然石の配石があり、それぞれの石の径は25~10cmであった。(Fig 6)

二次遺構の周溝の外側にあたる位置に同深度の配石がありA-2の環状石点より2.2mのほぼ等間隔のものであった。

なお配石は、この周溝外側部分の深度120~140cmの位置に(B-2の中央部)5個の配石があり、その他にB-3に4個の配石をみた。この配石をC-2の配石位置より計測すれば2mの位置にあり、玄室の天蓋部の粘土による封閉施設の周辺に配置し工程への一助としたのではないかと推測できる。

本墳での特質すべき遺構の一つと考えられる封土中の配石は、明らかに意図的である。特にA-2において発見した環状配石はFig 6で示めすように玄室の真上にあたる位置にある。またこの配石と粘土塊とを結びつけて考えることも可能である。二者を結び付ける場合粘土塊は祭祀跡と考えることもできるのではないだろうか。

以上の考察にさらにプラスするものにB-2よりFig 4の3に示す土師器を出土していることと、A-2において配石内やその周辺より30数片の土師器の細片を併出している。

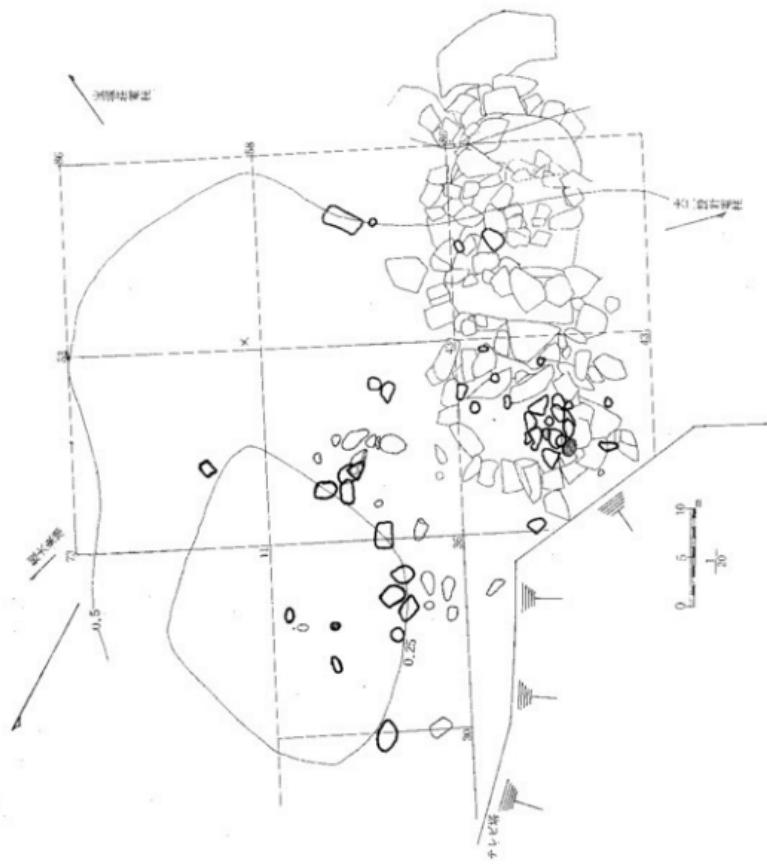
配石と土器片の出土状況

二重に配石されていたA-2の上部の配石にともなって土師質の土器Fig 7が出土しており、土器文様は縄文土器を思わせるような条痕文様である。施文は二種類に分類される。一つは平行に施文され、その一つは平行施文と斜交施文が交叉したものとの複合施文である。器厚は0.7~0.8cmである。胎土はよいがもろく、色調は表面は帶青褐色であり、須恵器かと思わせる焼成でもある。内部は赤褐色であり上部的手法による焼成を思わせる土器でもある。口縁部の出土はなく不明であるが、底部はFig 7の12図に示すもので、底部はしば口で親指による杯の調整を行ない底面としており、2cmの内径を有している。器厚は最大0.8cm、最小0.6cmであるが、内湾角度からして圓形土器と推定する。またFig 7の8図の3による胴部の内径は18.1cmを測定した。

前述したことをまとめると二重の環状配石があり、さらにその内部や、周辺に出土した土器片(土師器)からして、また後述の築道の造成から見た時、本墳造成の過程においてなんらかの行事がおこなわれたのではないかとも考えられる。

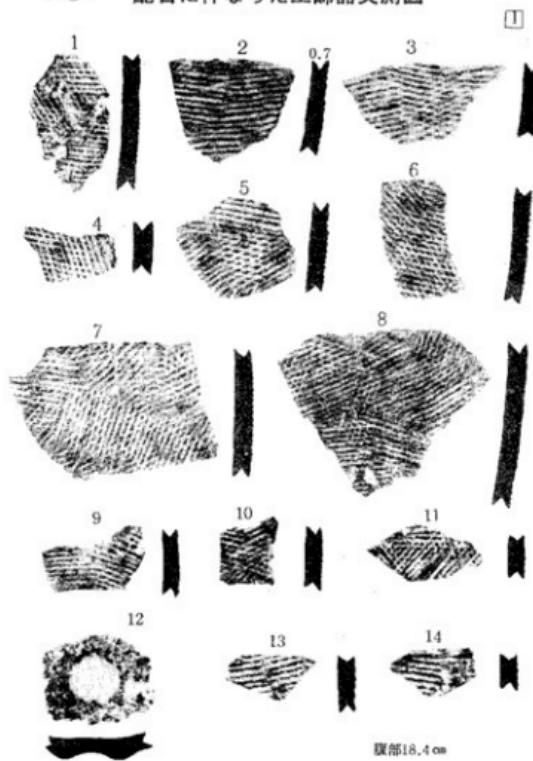
また今一つ環状石の西部にFig 6で斜線でしめすものは、榦木の切株であり径12~18cmの楕円状で南側の発育のよさを見ることもできる切株がこの遺構と如何なる関係にあったかは今後の研究にまちたいが一資料提示になれば幸いである。

Fig 6 墳丘中における配石遺構実測図



(×印はFig 7の②の3出土地点)

Fig 7 配石に伴なった土師器実測図



VII 内 部 構 造

前方後P墳の後円部中央に位置する横穴式石室並びにそれに付属する排水溝が、三島神社古墳の内部主体をなしている。

横穴式石室上の墳丘土中には古墳築造に係る配石遺構を中心とする第二次的な遺構が存在したことは前述の通りである。

〔1〕石室の平面

長軸を N23.5°W にとる横穴式石室を有する古墳である。玄室、羨道部の最下基盤面は、ともに墳丘基盤面と同基準面に設けられている。玄室の平面プランは、右側壁面 360cm、左側壁面 370cm となっている。玄室幅は奥壁、前壁面で 200cm、中央部で 192cm とや、狭くなっているがほど長方形を呈している。幅と長さの比は 1 : 1.85 となっている。

羨道部は左片袖式となり、右側壁は全体として玄室右側壁面に沿って延びている。羨道部入口は幅 90cm で、羨道と玄室の取り付け口は 110cm となって、入口に沿ってや、狭くなる傾向を有している。羨道と玄室の取り付け口は両側面とも大きな河原石を用い、右壁は 10cm 羨道中央部にせり出しており、玄門としての意味を持たせている。羨道の長さは右側壁面下が 200cm、左側壁が 190cm となっている。羨道長に対する玄室長の比は、右壁において 1 : 1.8 となって玄室長と玄室幅の比とは、同率となっている。さらに、玄室の幅と羨道の長さの比は 1 : 1 となっている。

これらのことから、計測に従って石室が築造された可能性がないでもないが、この点については事実を記すに留め結論は保留したい。

〔2〕石室の床面構造

玄室内床面の最下基盤面の地層は、良質の和泉砂岩の風化した黄褐色砂質土層からなっている。この上は厚さ 75cm 堆積しており、固く詰き締められている。この面は前壁に向ってや、緩傾斜をなしている。

この砂質土層上に、緑泥片岩や石墨片岩、さらに和泉砂岩の偏平な河原石を、10cm の厚さで全面に敷きつめている。河原石は 3 段に積まれており、お、むね上段の河原石は大きく、中には礫状の石をも含んでいる。下段は比較的小さな河原石を用いている。河原石の大きさは 4 × 5cm 前後を普通とするも、ま、28 × 18cm の大きな河原石も混在する。そのうち大きな河原石だけは和泉砂岩であるが、他は緑泥片岩、石墨片岩である。

これら偏平な河原石は水平に並べられているもの、奥壁側が前壁側に比して 15cm 高くなっている。羨道入口部からの比高は 20cm となって、ゆるやかではあるが傾斜を有している。このことは、後述する排水溝の造営から考えると、排水のために意図的になされたものと思われる。

なお、羨道の床面は砂質土層が直接現われ、河原石は存在しなかった。玄室の河原石上ならびに河原石下の砂質土層には、特殊な周溝等の遺構は検出することができなかった。

床面の構造は盜掘の際の踏み荒しによって、河原石が一部移動した痕跡が認められるも、遺物は別として、埋葬時の状態を保持していたものと認められた。

[3] 玄室構造

玄室の石積の基盤面は、洪積台地の表土層を切削した平坦面である。

玄室に使用されている石材はすべて和泉砂岩の河原石である。玄室の右左両壁とも第一段の石は、切削した洪積台地の和泉砂岩の砂質土層上に直接置かれてただけで、基盤面を掘り込んで埋めた状態ではなかった。この最下段の基礎石は、河原石が縱横手法で石積されており、長大な奥行のある石は用いられていない。

2段目以上は通称どんこ石と呼ばれる河原石を用いた平積手法でおこなわれている。それゆえ3～4段目より上部はや・石積列が乱れる傾向を示している。長いどんこ石を用いているため壁面部は小さいが、埋設している奥行部が非常に長大である。それとともに日地の間隙が大きくなり、規則正しい整然とした石積がおこなわれなかつたものと思われる。

日地部の間隙には一見すると、小さな河原石が目詰めされている。しかし、目詰めに用いられた石は、楔形に石積されているため、壁面にはその鋭角端が現われているに過ぎず埋設部の奥行は大きい。

3段目の石積から、両側壁面とも張り出し手法によってわずかづつ縮約をみせている。

奥壁も両側壁と同様の石積手法であるが、比較的形の整った河原石で9段に積んで築造している。奥壁は両側壁よりもさらに一段と上部にいくに従って縮約をみせている。

玄室内の石積に用いられている石は、一見すると余り大きいように見えないが、これは縮約によって穹窿形を得るための構築方法であり、個々の石はほとんど全長75～160cmの長さを有し、玄室壁面にはわずかにその一端が顔をのぞかせているに過ぎない。このことから、特に大きな河原石を用いた玄室といえる。これに対して前壁はほとんど縮約していない。

両壁と奥壁の縮約した玄室上部に7個、羨道上に2個の偏平な大きい河原石の天井石を架設している。それらの石と石の間隙部には、比較的大きな河原石を用いて充填している。

天井石の架設方法は、まず羨道上から順次玄室上に架している。奥壁部上はこれと別個に偏平な石を架し、羨道入口から8番目の天井石を最後に架設して完了している。それゆえこの8番目の天井石は楔形の小さな石を用いている。

玄室の高さは、奥壁近くで190～200cm、中央部で210cmを有してはいるものの、ほゞ水平である。天井部の長さは右側壁上で300cm、左側壁上で320cmと、床面上に比べるとそれぞれ50～60cmの縮約をみせている。この縮約は奥壁の縮約のみであり、それゆえ半穹窿形をしている。他方天井部における玄室幅は、両側からそれぞれ約30cmの縮約をするため、140cmとなりゆるやかな穹窿形を呈している。

[4] 羨道構造

羨道部の右側壁は玄室右側壁の延長部であり、その石積の構築手法は同じである。片袖の左側壁は玄室左側壁と同じであるが、6～7段の整なった石積でや・趣を異にしている。

羨道を立体的に観察すると、羨道と玄室の取り付け部分の大井石は縦に架され、10cm羨道空間に垂れ下って狭くなっている。これは左側壁面の取り付け部の張り出しから考えて、玄門として意識的に工夫されたものと推測される。

羨道部の両側壁の入り口部は上段にいくに従い石積が省略され半円状を呈している。

[5] 羨道閉塞装置

羨道の閉塞は、後述する羨道の床面上に存在する排水溝の右組上におこなわれている。閉塞のための充填石は、羨道入口部と玄門部の二ヶ所に二重になされており、その中央部には土砂が充填されていた。閉塞に用いられている石は、おむね20×30×15cmの河原石と一部割石である。この割石と人工のものではなく、自然ないしは偶然に割れたものを用いたに過ぎない。

これらも規則正しく石積されたものではなく、たゞ羨道部の空間に石を無難に投げ込んだ状態に近いものである。中にはその隙間に合わさざりかく割石を縦に押し込んだ状態のものも認められた。

玄門部の閉塞のための充填石は、玄室の天井石に接する部分には存在しなかった。これは別項でも詳述されていることだが、この上部の墳丘の地層の乱れということを考え併せると、盜掘の際の破壊の結果であると考えられる。

羨道部入口の閉塞方法は、羨道の側壁断面に沿って半円状に充填されていた。閉塞口の前面は、墳丘構築のところでも触れているごとく、粘質土を含む赤褐色の山土でさらに補強閉塞されており、この層には二次的な地層の乱れは全く認められなかった。このことから、閉塞口を取り除いた追跡ないしは盜掘は考えられない。

玄室内には遺体埋葬設備としての石棺、陶棺等は存在しなかった。恐らく、木片の断片が若干ではあるが出土することから、木棺等に類するものが遺存していたものと推測されるが、盜掘のため撹乱されており、発掘によってこれを明らかにすることは不可能であった。

[6] 排水溝構造

一島神社古墳の内部構造上の特筆すべき事項としては、排水溝をあげることができる。愛媛県下の横穴式古墳で明らかに排水溝とみられるものは一島神社古墳が初見である。

玄室内の床面においては小さい偏平な河原石が敷きつめられている以外、特殊な排水溝的な構造は全く検出されなかった。しかし、羨道部の取り付け口、即ち玄門から羨道部を経て後円部の南麓端に至る間に、石組による明瞭な排水溝が確認された。

排水溝は、玄門端から計測すると全長640cmであるが、発掘前の後円部墳丘端の崩壊状態から察すると、約700cm前後はあったのではないかと推定される。排水溝の主軸方向は石室の主軸方向とは同方向を指向するも、石室主軸よりも西に5°振っている。排水溝の玄門部基端面から340cm付近を界にさらに西に10°振っている。

排水溝の基端面の幅は90cm、深さ25cmで、羨道床面上の玄室と接する側石下には一部小さな河原石が敷きつめられている。排水溝基端面の溝幅が90cmと広いため、溝の中央部に脚石を基端面側で2列に、100～130cm離れたところで1列に置き、この上に偏平な天井石を架して暗

渠構造としている。

漢道部人口での溝幅は20cm、深さ10cm、排水溝中央部では幅10cm、深さ23cmとなっている。

これらの排水溝の基盤面は、石室最下床面と同様に砂質土壤の敲き締めによる緩傾斜の平坦面よりなっている。排水溝の側石は、この層中に少し掘り込んで横位に立石されている。これらの側石はほど長方形の河原石を用いている。この側石上には暗渠を目的とした細長い天井石を並列状態に架している。暗渠のための天井石は漢道部入口において5～6個体分ほどがなく、暗渠の役割を果していない。これが構築當時から有意に存在しなかったことは明らかであり、いかなる原因によったものかは発掘によって明らかにすることはできなかった。

漢道部における排水溝基盤面は、わずかな傾斜を有するのみであるが、漢道部入口から排水溝出口にかけては約12°～13°の傾斜を有して延びている。

これらのことから、玄室内の排水を目的とした暗渠排水溝構造であるとみてほゞ間違いないだろう。玄室内の河原石もこれらから考えると脱離、排水の役割を果していたものとみてもあながち過言ではなかろう。これら排水溝についての報告も全国的にその事例が存在することは知られているが、本古墳のごとく、河原石による構造的に明瞭な排水溝施設が設けられているのはめずらしく、興味あるものといわばなるまい。

IX 石室内部の遺物の出土状況

漢道を開口した結果、玄室の玄門部付近の床面上には特に二次的な堆積土が厚く確認された。その堆積土の厚さは約50cmであったが、玄室奥壁近くでは約35cmで、中央部では13cm内外であった。この二次的堆積土の発掘過程で判明したことだが、前壁面の土砂の堆積の異常な厚さは、この層中から寛永通宝が一枚出土したことや、この上部の玄門の閉塞のための充填石が一部消失していたこと、さらにその上の地層が搅乱されていたことなどから、盗掘に係るその後の土砂の流入の結果であろう。

玄室内の遺体埋葬のために存在したであろうと推定される木棺や、副葬品が検出されなかったことも、この盗掘による結果であろう。

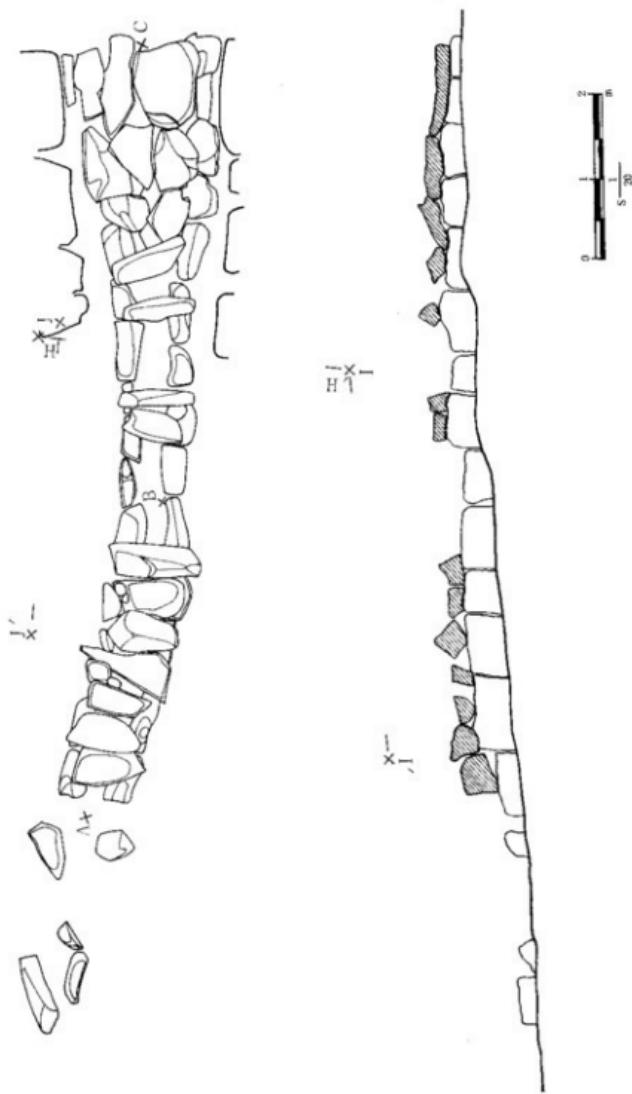
これらの二次的混入土を除去した結果、小さな綠泥片岩、石墨片岩を中心とする河原石の床面上に、40×25×15cm前後の河原石の剥落片が18個、これに接して検出された。これらの剥落した河原石は、玄室の石積に使用された石が封圧によって割れ落ちたものと解される。

玄室の副葬品の出土範囲は床面上全面に検出されたものではなく、主として三ヶ所の範囲から集中して出土している。

その一つは前述のごとく、前壁面に近い部分で、落石を除去した際に須恵器の器台形土器片1個体分が割れて散乱した状態で出土した。他の遺物としては、高杯形土器片が僅か数点併出したに過ぎなかった。

玄室の二次的堆積による混入土は、上部の埴丘構築の堅牢性から考えると、盗掘前にはほ

Fig 8 排水溝平面図



とんどなく、もしあつたとしても僅かな厚さであったと推測される。それゆえ、盗掘の際には副葬品は床面上にその器形をみせており、これらがすべて搬出されたものであろう。須恵器の器台形土器の破片のみは、落石によって破損を受けると、もに被覆されたため、搬出されず放置されていたものと思う。このことは盗掘口とみられる壙丘上に須恵器の残片が検出されていることからも伺える。

その二は玄室の前壁面より170cm北寄りの、左側壁に近い落石付近を中心とする周囲であり、河原石の床面上ないしはその間隙の窪みより、6個の管玉が不規則に確認された。このうち4個は8cm間際に連続しているも、他の2個はこれらのグループから20cmも間隔を置いて検出されている。それゆえ、これらの管玉は連續状態で出土したとはい難い。恐らく、盗掘の際に一部持ち出されたものであろうし、そのうえこのときの搅乱によって埋葬時の状態を保持していたとするには若干の無理がある。

さらに管玉の出土した周囲の直下からは夥しいガラス丸玉が集中して出土した。ガラス小玉はこのガラス丸玉の下から出土した。管玉ならびにガラス丸玉、ガラス小玉は主としてこの範囲から出土し、他の場所ではそれが全く認められなかった。

これらのガラス玉類は、床面上の偏平な河原石上にあるものも認められたが、その半数近いものは、河原石と河原石との間隙部に落ちこんだ状態で遺存していた。左側壁寄りでは環状の連續状態で遺存していたガラス小玉の一群が出土した。これはガラス小玉の中でも特に小さい玉の一組であり、ガラス丸玉、管玉等は全く存在しなかった。

玉類は無差別に混在していたのではなく、上部から管玉、ガラス丸玉、ガラス小玉の順序で重なった状態で出土している。このことはガラス小玉が環状に連續した状態で出土したこと、を考え併せると、各玉類は單一の種類のもののみが連續されていたものと考えられなくもない。この付近からの他の副葬品としては、木片のそれも極く細片が数片と、青銅器の破損品を数点と、2・3の鉄器片を検出したに過ぎない。

環状連續のガラス小玉のすぐ近くから、歯牙が1個出土した。しかし、人骨片はその残片すら確認することはできなかった。

第三群は奥壁から30~40cm内側に近い場所のグループである。この奥壁周辺部は奥壁上天井石の間隙部からの土砂流入が若干あった。しかし、前壁玄門部の堆積土とはその堆積状態から明らかに識別でき、盗掘によるものではなく、構築当初からの自然の流入堆積によるものであるといえる。それがためにこの奥壁部の堆積土下ならびに落石下に比較的多くの副葬品が遺存していたものであろう。

左側壁寄りの落石下ないしはその落石に取り囲まれた床面の河原石上から4個の金銅製の鈴が、河原石の間隙部から2個の鈴がそれぞれ出土した。前者の4個はほど環状に近い状態であった。鈴は球形ではなく半球形で、球面を上部にした状態であった。他の2個は河原石の間隙中に垂直して出土した。これら金銅鈴とおぼしき遺物のうち、球形で出土したものは皆無であり、鈴とするにはいさゝか問題を含んでおり、金銅鈴と呼ぶよりも、半球形金銅製垂飾品と称

Fig 9 玄室内部の遺物出土状況図



すべきが妥当かもしれない。原形は鈴であったろうが、その出土状態からして、鈴が破損し、それを再度利用したとするのは杞憂であろうか。

半鈴形垂飾品のうち環状に近い状態で出土した4個の周辺から、滑石岩製のや、大形の臼玉が58個、小形臼玉が181個出土した。これら臼玉類の出土状況は連鎖を現わしている状態ではなく、前述のガラス玉類と同様、大形の臼玉が上部から、小形臼玉が下部から不規則な状態で出土した。それらの大半は床面の河原石の隙間に落ち込んだ状態であった。

この臼玉群の最下部から銀製の空玉が5個完形で、1個は半分に割れた状態で検出された。奥壁部の右側壁寄りからは、主として鉄器片と金銅製帶金具類が数多く出土した。これら以外では木片の断片が若干併出したに過ぎない。

金銅製帶金具は合計15個で、いずれも鋸部を上部に見せていた。これら帶金具以外にも青銅器片が認められたが、極く細片であるため、その本来の形状を推測することも無理である。青銅器片に混在して鉄釘が19余本と、刀子・鉄鎌、それに細長い不明鉄器が多く出土した。鉄器類は重なって出土したものもあるが、東西に並列した状態で確認された。

以上の遺物は床面の偏平で小さな河原石上から主として出土し、一部玉類は床面の小さな河原石の間隙部に落ち込んでいた。それも2段目の河原石まで、止り、最下段の河原石中には何らの遺物も存在していなかった。さらに3段目に積まれた河原石下の砂質土層においてもしかしかりであり、砂質土層中の-70cmまで試掘を実施したが、何ら遺物は確認されなかった。

なお溝道には排水溝の石組が構築されているのみで、副葬品は全く遺存しなかった。

以上のごとく玄室内の出土遺物の状況は、既に盗掘されているため埋葬時の状態を完全に把握することには程遠い有様であった。

たゞ残存する遺物の出土状況から見る限りにおいては、いずれも落石付近か河原石の間隙部に遺存することから、これらはそれほど擾乱されたものではなく当時の副葬状態をある程度示していると想像されなくはない。この点に限って述べると、遺物の出土地域は大別して三つの範囲に大別される。その一は玄門近くの玄室内で、須恵器類を中心とした遺物が置かれたものと思われる。中央部では管玉、ガラス丸玉、ガラス小玉の玉類を中心とするものであり、ガラス小玉が環状連続で出土し、併せて歯牙が出土していることから、内部に木棺に類する遺体埋葬遺構が存在していたと仮定するもあながち飛躍した推論ではなかろう。ガラス小玉の連続が左側壁近くにあり、歯牙も同様である点、頭部を西にして埋葬したとともにやぶさかでない。

その二は奥壁近くの範囲であり、その特色は主として馬具か、それらに類似する遺物や鉄器が多出している点であろう。なお興味ある点は中央部には管玉やガラス玉類が中心であり、滑石岩製垂飾品が全く併出しないのに対して、ここではそれにかわって滑石岩製臼玉と半鈴形金銅製垂飾品のみが出土し、逆にガラス玉類を全く伴なわないことである。これは埋葬された人間の男女差によるものか、また全く別の意味を有しているのかは疑問の存在するところであり速断をくだすことは差し控えたい。

奥壁に近い部分に遺体が埋葬されたかどうかは発掘の結果からは断定しにくく、馬具類、武器、その他の器財類が副葬された場所であるかも知れない。たゞ奥壁中央部から右側壁寄りで青銅器、鉄器とともに鉄釘と木片が出土していることから木棺に類する施設が存在した可能性はある。松山市天山北古墳の例が示すごとく、これらの器財が木箱に入れられて副葬されていたことも考えられるのであり、直ちに木棺として理解するには資料が不足する。たゞ中央部も奥壁部も左側壁寄りから、玉類が出土しているという共通性を有することを付言して置きたい。いずれにせよ、横穴式石室は家族葬をおこなうための墳墓形式であり、追葬がおこなわれることが通例である。しかし三島神社古墳においては、狭道部の閉塞状態を明らかにする外覆部の地層が、非常に安定していることから追葬は考えられず、もし奥壁部にも遺体が埋葬されていたと仮定しても、それは追葬ではなく同時重葬としか考えられ得ない。

X 玄室内部出土遺物

(1) 玉類

(1) 管玉

管玉は合計6個出土している。すべて碧玉製で、色調は淡緑色を呈する。6個とも完全な円筒形で全面研磨によって整形されている。孔はほとんど一方端のみから穿たれている。6個のうち4個は一端から迎え孔が穿たれているが、それも最後の整形の段階の工程を現わしているに過ぎない。長さはいずれも異なっている。最長のもので28.5mm、最短のもので17.6mmである。直径も長さと同様に最大径9.9mmから最小径7.4mmといずれも相違している。個々の計測値はTable 1にかかげる。

Table 1 管玉計測表 (mm)

図中No.	色	長さ	直径	孔径
90	淡緑色	28.5	9.9	1.6
91	タ	27.0	9.5	2.0
92	タ	24.5	8.3	1.9
93	タ	23.5	8.6	1.7
94	タ	19.5	7.4	2.0
95	タ	17.6	7.5	2.2

(2) 滑石岩製垂飾品

一般には有孔滑石と呼ばれているものである。これが2個出土している。その一つは直径が約3.2cm、厚さ5mmのや、変形した円盤形を呈し、中央部に径2.5mmの孔が穿たれている。両面とも一部剥離の際の粗面が残存するも、粗雑にすって整形している。擦痕は両面同方向ではなく、直角に交差している。周端は全面すって整形している。他の一つは的確な形状を有していないが、便宜上変形五稜形とでも表現すべきものである。最大長4cm、最大幅3cm、厚さ9.1mmで、中央部に2.7mmの孔が穿たれている。両面、側面とも前者と同様にすって整形している。

(3) ガラス丸玉

ガラス丸玉は合計128個で、色調は濃紺を主体とするも、一部に紺色に近いものも認められる。しかし、この僅かな色調の変化は材質やその他の有意的な原因によるものではない。

すべての丸玉の両端はすって整形をしているが、両端面が平行なものはほとんどみられない。丸玉には気泡を含んだものが多くみられ、そのうえ形状は不揃である。長さ3.8～9.1mm、直徑7.0～9.8mmと多様性に富んでいて、同形のものは全く存在しない。いずれも長さよりも直徑が大になる傾向を有している。孔径は1.5～3.7mmとバラエティーに富んでいるもの、おしなべて1.8～2.0mmの範囲のものが大半を占めている。このことは、後述するガラス小玉の形状と考えあわすと、ガラス製玉類の製作工程を現わしているといえる。

(4) ガラス小玉

出土したガラス小玉は合計1,219個の多きに達する。これらを詳細に検討すると、や、形状の大きな一群と、や、小さな一群に分類される。

や、大きい小玉群は、長さ2.8～4.5mm、直徑5.0～6.0mmと不揃である。孔径はおむね1.5～1.8mmである。色調はすべて濃紺ないしは濃紺に近い色であり、玉内に気泡を含んでいるものが数多く認められる。個体数は754個である。

小さな小玉群は465個出土しており、いずれも色調は濃紺色を呈する。形状は小さいうえに不揃で、中には皿形や円盤状に近い異形のものまで含まれている。長さは1.5～4.0mm、直徑3.4～4.5mm、孔径1.5～1.8mmと、多様性に富んでいる。いずれも直徑が長さに対して大になる傾向を持っている。このことは前述のや、大形の玉類と同様である。

(5) 大形臼玉

ここで述べる大形というのは、通有の大形という意味ではなく、本古墳出土中のや、大形に分類される白玉類である。

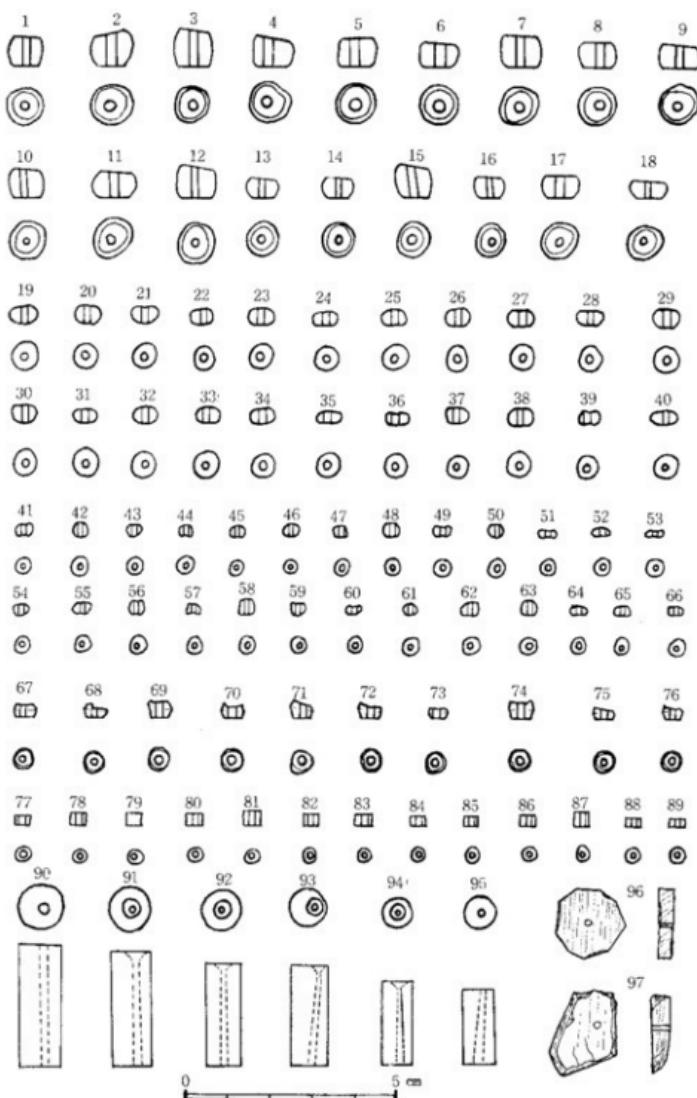
大形臼玉は58個出土している。いずれも滑石岩製であり、色調は灰緑色に近い色を呈する。長さ1.8～4.0mm、直徑5.5～5.6mmで、孔径は2.0mm前後を中心とする。中央部には余り高くない陵線を有し、これを中心に上下は径がや、縮少している。周囲はすって整形している。両端のうち一端はいずれもすって平坦に整形しているが、他の一端は切れ目のついた折れたままの状態で、凹凸面が残存している。

このことは滑石岩製臼玉の製作工程によるものではなかろうか。それは、直徑がほど同形であり、一端のみが整形されていることからである。一度棒状に製作したもの、さらにある一定の長さで切り落したもので、その際に棒状に残った部分の片端だけすって整形されたものとみられるからである。

(6) 小形臼玉

小形臼玉は181個出土している。いずれも滑石岩製であり、色調は乳白色ないしは灰緑色を呈している。大形臼玉とは材質は同じであるが、色調において微細な点に相違が認められる。長さ1.7～3.0mm、直徑3.3～3.5mm、孔径1.8～2.0mmで前者の大形のものと比較するとひとまわり小形品である。そのうえ、大形臼玉のごとく中央部に陵線を有せず、円筒形をしており、さらに両端が平行になるようすって精美に整形されている。

Fig 10 玉類実測図



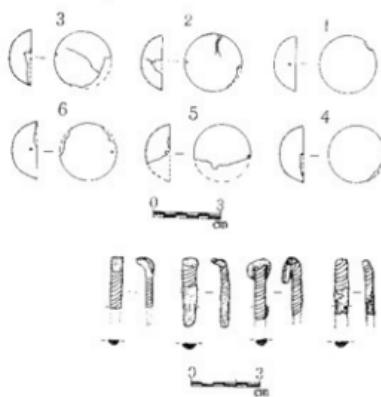
(7) 銀製空玉

空玉は6個出土している。そのうち完形品は5個で、1個は半分に破損している。いずれも銀製である。4個は直径7.3、2個は7.0mmである。形状は所謂玉忽形を呈しており、高さは直径に比して小さく6.4～6.6mmである。空玉の副部には水平横走する接合痕が遺存している。上下端には、それぞれ連縫のための孔が穿たれている。孔径は0.5mmである。6個のうち破損している1個は上下端に2個づゝの孔が穿たれている。これは破損後も別々に使用されたことを物語っているといえよう。孔部面は、両端ないしは一端面が連縫のための圧力により偏平になっている。

(8) 半鈴形金銅製垂飾品（仮称）

形態的には、鈴に類似する遺物と考えられなくはないが、遺物の出土状況からみる限りにおいては鈴とは理解しがたい。ここではその形態に従ってとりあえず半鈴形金銅製垂飾品として説明することにする。半鈴形金銅製垂飾品は全部で6個出土している。この6個のうち、完形に近いものが3個、一部が欠失しているものが2個と、残りを欠失しているものが1個である。材質は青銅製であり、その表面の一部に金箔が残存していたことから、青銅製の地金の表面に金箔を貼り付けたものであろう。遺物そのものは比較的錆化が激しい。形状は半球形というよりも亀甲形に近い形を呈し、径は2.5cmが4個、2.6cmが1個、2.4cmが1個で、おむね2.4～2.5cmの範囲内である。高さは0.95～1.1cm内外である。球体表面には文様や装飾とみられるものは全く存在していない。たゞこの6個のうちの4個には周縁部の一端に径0.8mmの孔が穿たれている。他の2個も周縁部が欠失していることから、孔が穿たれていたとみなすことができる。厚さは0.45～0.55mmである。この周辺から滑石岩製白玉が多く出土していることから考えると、垂飾品と理解するのが最も妥当性を有するよう思える。

Fig.11 鈴 実 測 図



[2] 鉄器類

(1) 鉄地金銅張金具実測一覧表 (cm)

番号	縦	横	鉄地厚	全体厚	番号	縦	横	鉄地厚	全体厚
1	2.9	2.3	0.3	0.75	9	2.3	2.15	0.2	0.7
2	2.9	2.5	0.3	0.8	10	2.35	2.16	0.2	0.7
3	2.4	2.25	0.2	1.1	11	2.6	2.7	0.3	1.2
4	2.5	2.25	0.2	1.1	12	2.7	2.45	0.3	1.2
5	2.5	2.2	0.2	0.95	13	2.4	2.25	0.2	1.6
6	2.6	2.15	0.2	1.3	14	2.16	2.35	0.2	1.0
7	2.7	2.5	0.2	1.2	15	2.78	2.22	0.2	0.8
8	2.5	2.3	0.2	1.2					

(2) 鉄地金銅張金具 (Fig 12図)

用途のわからない金具類である。それぞれの実測値は上述のとおりである。発見された15個は、すべて笠鉢でもって打ちとめられており笠鉢の先は、座金を補してとめられたことが12図の11で明らかである。笠鉢はそれぞれ等間隔で打たれたようであるが、笠鉢の打たれた数が3個のもの、4個のもの、5個のものと3種に分けられる。

3種ともに鉄地の裏に皮布が打ちとめられており、馬具の腹帶の辻金具ではないかと推測できる。12・13の5個の笠鉢留金具は、一番器厚もあり用途上の必要性を生んだものと思う。さらに3・5・15の金具は4個の笠鉢の内おのの1対が等間隔であることも使用位置が同一であったとも考えられる。4は金具の縦の中央部に突起部があり、中に皮布をはさむようにして鉢留めされており、明らかに他の器物を接合したもので、おそらく実球・辻金具から杏葉をつるのに用いた金具であろう。

10・14で見る限りにおいては、笠鉢の痕跡が残っているが、その痕跡部分にも金銅をまいており、この金具の製作工程がうかがわれる。なお笠鉢にも金銅張がおこなわれている。地は薄い板金でその他の飾りはみられない。

皮布は一枚のものではなく幾枚かを重ねたものを使用しているようであり、5・8・15では、その状態がよくみられる。

(3) 棺 具(釘)

Fig 13の1に示すもので、大きく3種類に分類できる。その一つは断面の円形のもの、一つは断面の方形のものと、ただ一例ではあるが頭部を打ち広げてくび状にしたもので断面が長方形のものとある。いずれも木質が付着しており、埋葬者の木棺に使用したものとみたい。本遺物の最大長は5.5 cmである。総数で19本発見した。

(4) 刀子

PL Fig 13の2に示すもので、2・3・4はそれぞれ刀形をなしており、幅1.2~1.0cm、厚み0.3cmである。2~4共に鉤のような先端であるが、腐蝕による変形である。5は図に示すように、刀形が見られるのに対して、断面図では完全に2枚の韁物であることがうかがわれる。かりに刀子にいれてはおいたが、鉄としての考もしている。

1については、巾1.73cmで厚み0.75cmを測り、長さ現在長8.5cmで、やや平い背をもっている。刃部はよく調整されている。折損部の断面は、遺存部の他面とは腐蝕を異にしている。遺存部の内表面には明らかに、木質物の付着がみられる。このことから鞘に納められた小刀の一部と思う。なお中央部の◎印は、滑石岩製の臼玉が付着したものである。

(5) 鉄鎌

PL Fig 13の3に示すもので、総数8個片の出土をみた。

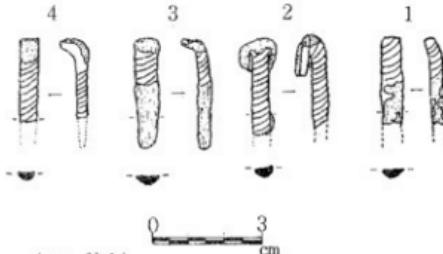
(単位cm)

番号	巾	厚み	長さ	番号	巾	厚み	長さ
1	1.06	0.5	6.36	5	0.9	0.45	3.46
2	1.10	0.5	不明	6	1.0	0.5	5.2
3	0.87	0.46	不明	7	0.8	0.6	不明
4	0.9	0.5	不明	8	1.06	0.72	不明

図1の鉄鎌は先端部の折損もなく完形品ではないかと推測するがや、短径である。図1・5・8でみられるごく鉢の一端に、木質の付着を明らかに残しているが、玄室内に筈（はず・やはす）の発見はできなかった。おそらく矢の木竹材をそのまま加工した筈（のはず）ではないかと考える。2・3・6・4・7はそれぞれ折損したものである。1・5・8にみられる鉄鎌は、矢柄への着装からして無径の尖根鎌に属すると思われる。

(6) その他の特殊金具

PL 插図(特1)に示すもので、1・2・4は一端が折損しているが、いずれも一端を折り曲げて、長方形の頭部をなしており断面は半円状である。それぞれに断面の径は0.4~0.5cmであり、3の最大長は5.4cmである。特記すべきことは、いずれも背面にラセン状の細工がほどこされており、1・3についてには明らかに木質の付着が認められることであり、またそれぞれに折り曲げが異なることが、なにを意味するのか不明である。



(Fig 特1)

Fig. 12 鉄地金銅張金具実測図

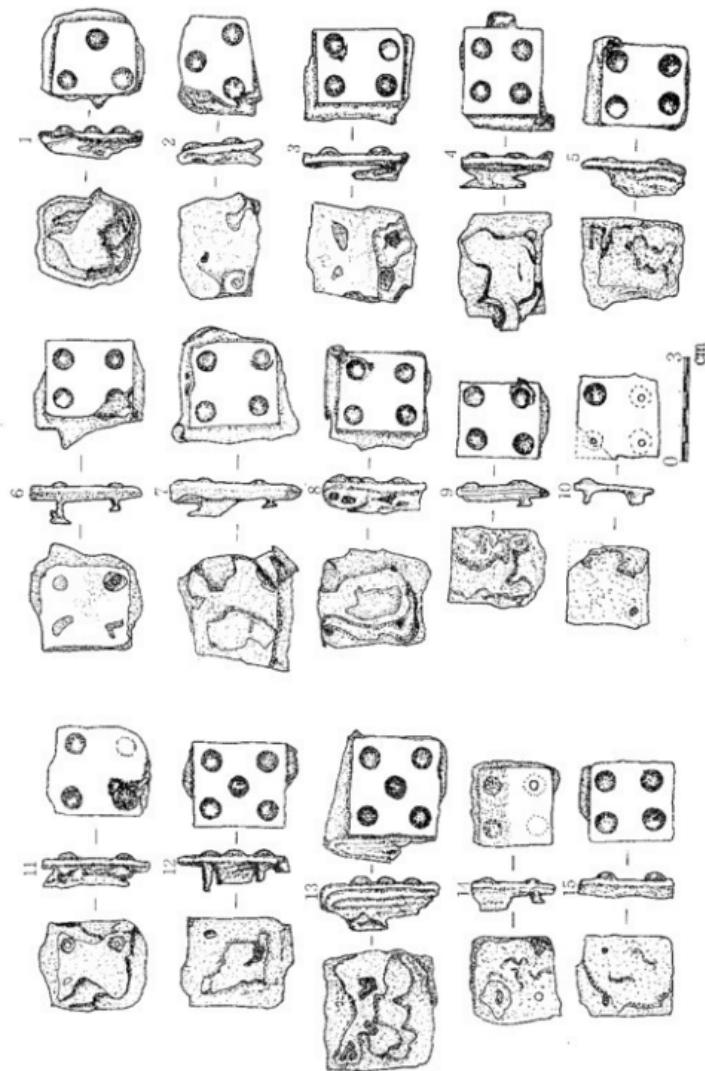
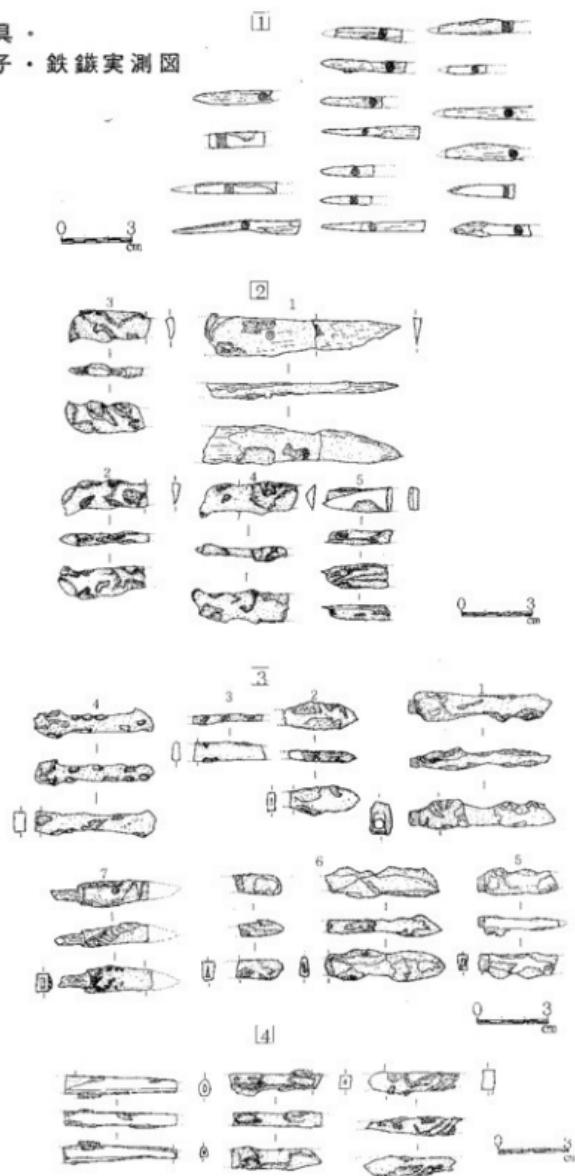


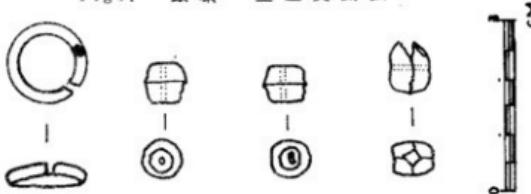
Fig 13 棺具・
刀子・鉄錠実測図



(7) 銀 環

銀環は銀芯をそのまま使用している。長径は1.46cm、銀環断面の直径は0.22cmの円形である。出土状況はガラス小玉や管玉の出土地点

Fig 14 銀環・空玉実測図



と一致して出土し、玉石の間に落ち込み縦状になって発見されたが、その周辺の調査においても、これ以上の出土はなかった。右図3点は空玉で径は0.76×0.7cmである。(玉類をみよ)

[3] 須 惠 器

(1) 石室内出土須恵器

石室内より出上りが認められた須恵器はわずかであり、器台の脚部破片と縁の口縁破片のみであった。これは盗掘者の採集の結果と思われる。したがって、もとよりその出土位置は原位置より移動しているものである。

a 器 台 (脚部のみ)

復原した結果、高さ43cm、(基部=5.9cm、1段=7.6cm、2段=7.6cm、3段=8.1cm、4段=7.3cm、5段=6.5cm)、脚部外径36cm、内33.6cm、上部頸接合部外径16cm、内13.4cmで、1段~4段に三角形の、5段に長方形のすき窓がそれぞれ4個、1・3・5段と2・4段がそれぞれ直線上に配列させてある。

1段には3列、2~4段は2列、5段は1列の櫛目流水文が付けられており、櫛目の幅は約1.5cmである。基部、及び1段には朱が塗布されており、焼成は硬質で灰褐色味をおびており、受皿があれば器高は50cmを越すであろう。朱が付着している事は、器台の用途から供獻、祭礼等の儀式に用いられた際に塗布されたものであろう。(Fig 15の1)

b 縁

口縁部の少破片であるので、形態は不詳であるが、口縁弧が石室外出土の縁とほぼ同じであることから、口縁直径約13cm程度のものであろう。口縁部と頸上部にかけて櫛目流水文が認められる。(Fig 16の2)

(2) 石室外出土須恵器

築道部、玄門上部、即ち盗掘者が侵入したと思われる地点の第1層、腐植土層中より、縁、环、环蓋の破片が、墳丘くびれ部(Eトレンチ)より、壺、甕と思われる破片が検出された。これらはおそらく盗掘者が石室内より持出し、放置したものであろう。

a 縁

推定器高約15cm、口縁直径約13.5cm、頸部外径5.4cm、内4cmで、口縁部と頸部に櫛目の流水文脣部には櫛目の突刺文がつけられている。焼成は硬質で胎土中には砂粒が少なく、黒灰

色味をおびている。(Fig 16の3)

b 壺

- ・ 器高4.3cm, 口縁直径約15cm, 内反り高さ1.5cm, 内反り部直径約12.6cm, 壺蓋受口幅0.5cmで焼成はや、軟質で砂分を多く含む。(Fig 16の4)
- ・ 器高不詳(有蓋高杯か?), 口縁直径約19cm, 内反り高さ2.1cm, 内反り部直径約16.5cm, 壺蓋受口幅0.7cmで焼成は硬質で灰色, 表面に灰釉を付着させている。(Fig 16の5)

c 壺 蓋

- ・ 器高4cm, 口縁直径15cm, 口縁より2.5cm上に突起帯を付し, 口縁端はや、外反する。焼成は硬質, 内面に焼成時の膨張空起が多く見られる。(Fig 16の6・7)
- ・ 器高4.7cm, 口縁直径16cm, 口縁より2.3cm上に突起帯を付し, 口縁端はNo.7よりもさらに外反している。(Fig 16の8)

d その他

壺, 壺のいづれも少破片であるので, その形態は不詳であるが, 壺の頸部破片は厚さ4cmで, 外面に櫛目流水文及び格子目押型文, 内面に円弧のいわゆる調整押型が見られ, 頸部の直径でも40cmを越し, かなり大型である。

考 察

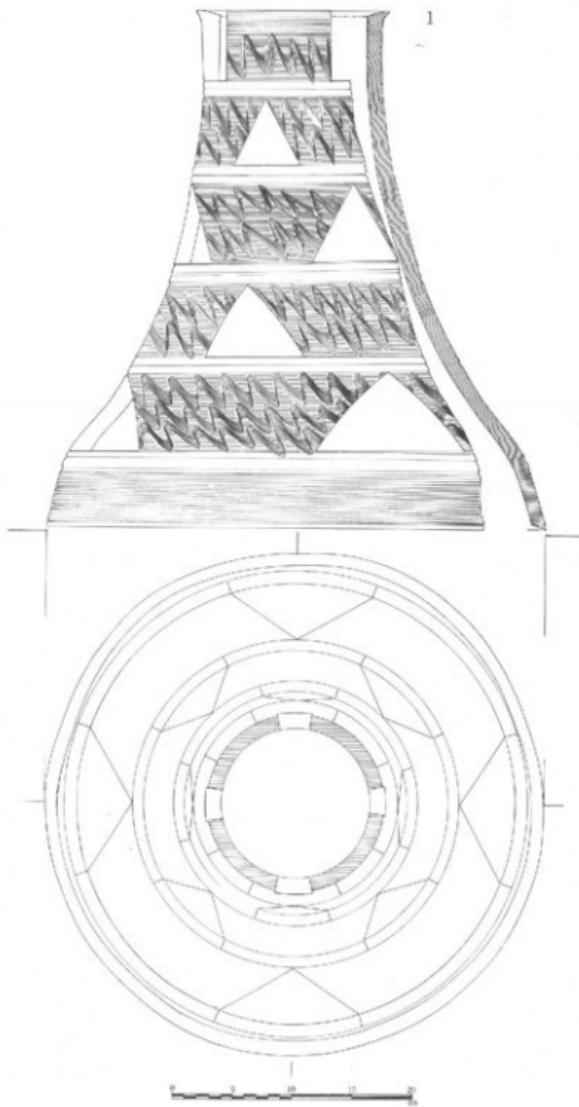
須恵器の出土数が少ないために相互検討がつきにくく, また県内, 及び松山平野部の須恵器編年が完成されていないので, 断片的な資料に頼らざるを得ない。

また, 編年を近畿一円に求めるることは地域の格差等の種々の問題も起りうるが, 県内の編年がない以上, 近畿に編年想定するほうが望ましいであろう。

- ・ 器台に関してはその出土例が少なく比較し難いが, 天山北古墳(注1)→大下田2号墳(注2)→東仙寺古墳(注3)→芝ヶ岬古墳(注4)より出土の器台に比べて, 脚部への開きが頸部に円筒形を持たず下方に拡がっていることから, 上記の古墳出土の器台よりは先行形式であることが伺い知れる。編年上に位置づけるならば, 愛知鏡塚古墳出土(注5)と三重岡古墳出土(注6)=滋賀, 鴨(水尾)船荷山古墳出土(注7)との中間に位置づけられるであろう。
- ・ 廓に関しては一般的な, すなわち口縁部から頸部にかけて, 漏斗状に絞られた形態(注8)より先行形式であり, やはり上述の水尾系列に充当するものであろう。
- ・ 壺に関しては, 壺蓋を受ける部分が非常に狭く, 身の返りが高く, 内反りはや、内傾しているがNo.5では直立に近い。しかし, いづれも浅底である。この形態の出土例は県内に少なく比較し難いが, 一般的な壺よりは先行形式であろう。

水尾形式は須恵器が日本に伝わった段階(5C後半)より日本化し, 飛躍的に全国に侵透して行く時期(6C前半)に位置づけられる。しかし, 本古墳出土の須恵器の年代を水尾形式の絶対位置に求めることは, 各地の地域差や独自の発展もあり, また滋賀と異なり, 愛媛への伝播には時間を要したことを考え合わせると, 本古墳石室内外出土の須恵器は水尾系列に属し, 6C中頃の製作と解釈するのが妥当であろう。

Fig 15 器台実測図



- 注1 松山市天山北 2個出土 市教委藏
 注2 伊予郡砥部町 4個出土 県教委藏
 注3 松山市古三津 2個出土 三津浜中学校藏
 注4 松山市鷹ノ子 2個出土 久米中学校藏
 注5 日本の考古学 IV 横崎彰一編年 1966 河出書房
 注6 注5に同じ
 注7 世界考古学大系Ⅲ編年 1961 平凡社
 注8 注2に同じ 及び 久米高島出土 久米中学校藏

Fig 16 須恵器実測図

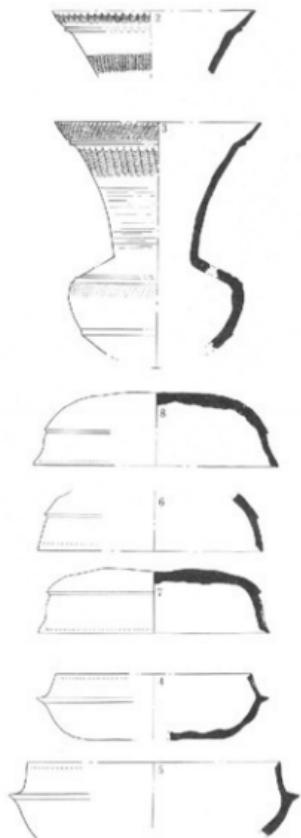
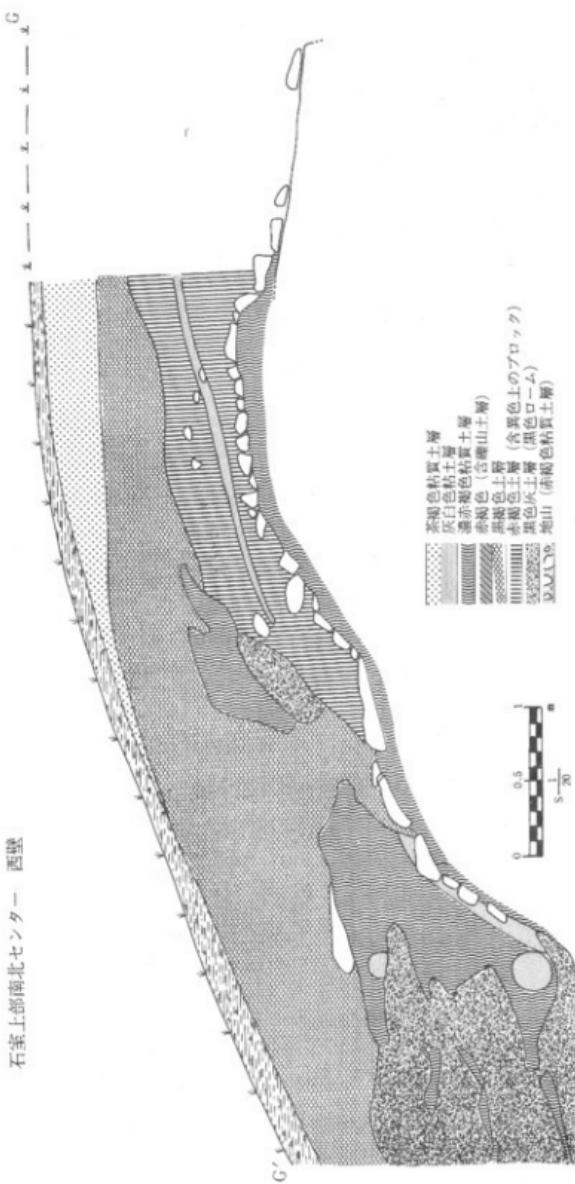


Fig 17-1 後円部墳丘断面図

石室上部南北センター
西壁



A-2～A-3 西壁
C(G)より

Fig 17-2

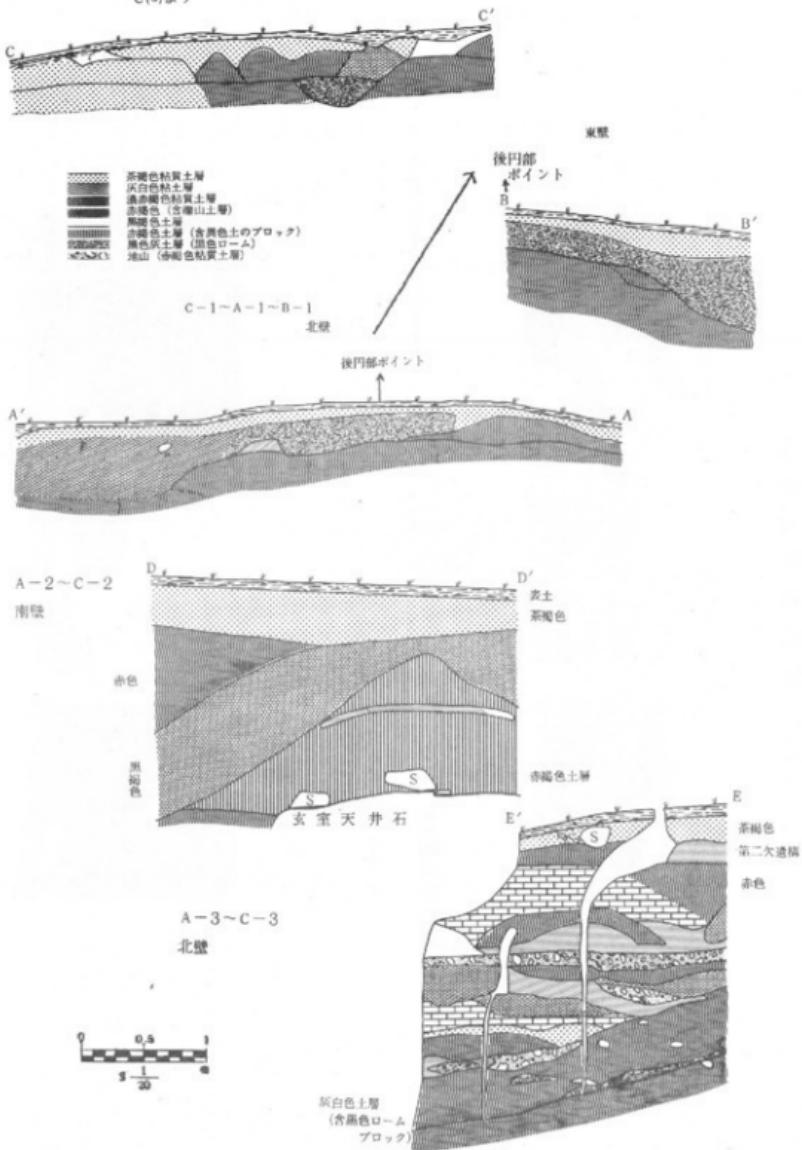


Fig 17-3 後円部墳丘断面



XI 塚 輪

[1] 墳輪の出土状況

埴輪片の出土は実に多く、後円部及び前方部の墳丘上で表面採集したものが多く、また、後円部くびれ部での出土片もあったが、本墳での特質は前方部において埴輪円筒列を発見したことにある。なお本墳では、埴輪列は一条であったことに特に注意したい。

墳丘上の表面採集及び出土は、すべてプライマリーな出土を見ず、断片的な出土であったことを記しておきたい。また出土した埴輪は、円筒埴輪が最も多く、その他に形象埴輪片を1片出土している。

(1) 円筒埴輪

円筒埴輪を、二つの種類に分けることができる。そのひとつは刺頭形とし、ひとつは普通の円筒とする。なお、円筒埴輪はその破片頗る多く、その全部を復原しつくすことはできなかったので、そのうち主なものを復原した。これら復原したものにふれ記述し、その他については円筒埴輪の計測一覧及び実測図(Fig 20~23)を参照されたい。

イ、刺頭形円筒埴輪 PL 第 およびFig 21の17に示したもので、前述のように前方部端にやゝ3分された形で、前方部全長の端に面する場所と中央部に一基樹立していたものである。全長(現在長)40.5cmで欠損部を考慮すれば70cm以上になると推測する。上の環形部は16.8cmを占め、上端広く(上径34.0cm)下段括れて一条の突帯があり、突帯は台形に調整断面を示めしている。その後さらに狭まって下部円筒の肩に接続する。下部は4段の突帯と推測するが現存には3段を廻し、一孔を有し、下端経(現在34.0cm)に終る。黄褐色を呈して全面にへら調整のあとがみられる。突帯は明確で製作もすぐれている。この出土状態は下端部を残し北部に倒れほどんど破損していた。Fig 20の2も同形の下端部で突帯部からの下部のしづりが行なわれ、下端部の内部に指圧痕が残されており、下端部の外反するための工程と見ることができる。Fig 18の6からも同形口縁部片を出土している。

ロ、円筒埴輪 復元した8基について記述すると、まず突帯数の4段2孔と5段2孔の2種がある。4段の分はPL第18の12・13・14・15・21・22・23に示したものである。形態は12・13・15・21・23とはほぼ同様で長さはそれぞれ49.6・50.0・50.5・49.5・49.0cmで口縁が反転せず、表面はいづれもへら調整がなされている。いずれも輪積の跡がうかがわれる。内部調整は口縁部に手による平行調整の他は綫状の指条痕がみられる。14・22は前者と異なり口縁部が強く外に反転し、外内面共に円卓に調整されている。Fig 20の5は突帯5段の2孔である。上端は発見できず詳細は不明である。

(2) 形象埴輪

Fig 22に示す1片のみであるが、出土地点はFig 18のNo.32の円筒埴輪と出土した。同片を家型埴輪の一片であるとみている。

以上円筒埴輪の各種を紹介したが、これらを通じて考えられることは、朝顔と普通品とはその配置をや、考慮したこと、また同じ円筒でも、形状、製作法等が同一でないから、一人の手に成ったものでないことなどが看取される。この他にや、焼成温度を異にする、一見須恵器埴輪を思わせる円筒があったが、焼成過程の一資料として、今後の研究にまちたい。

円筒埴輪の計測値

(cm)

埴輪判別			埴輪		胎土		文書印				備考
方位置	出土の状態	形態	上部1径	下端部径	胎厚	色と形	1段	2段	3段	4段	復原による高さ
W		内径 外径 内径 外径			F 上						
36	擾乱はげしい	円 不明 不明				茶黄赤褐色					復原不可
35	*	円 不明 *				黄褐色					*
34	*	円 不明 *				灰褐色(スエ)					*
33	*	円 不明 *				茶赤褐色					*
32	*	円				灰褐色(スエ)					*
31	F部位置	円	11.0~14.0	1.8~1.4		黄褐色	2.15	2.25	不明	不明	復原不能
30	*	朝顔	14.3~17.9	1.5~1.2		帶黄赤褐色	2.5	2.0	不明	不明	*
29	*	円	11.0~13.6	1.3~1.0	*	*	2.5	2.1	不明	不明	復原可能
28	*	円	7.9~11.9	2.0~0.9	*	*	1.9	2.6	不明	不明	*
27	*	円	15.0~26.8	12.9~16.9	1.5	暗褐色	2.1	2.0	2.0	2.0~2.8	復原
26	*	円	10.0~13.0	1.5~1.9		灰褐色(スエ)	2.1	1.85	不明	不明	*
25	*	円	12.1~14.3	1.1		帶黃茶褐色	2.15	2.0	不明	不明	*
24	*	円	10.9~13.3	1.2		灰褐色(スエ)	2.4	2.0	不明	不明	*
23	*	円	25.2~27.0	12.6~14.4	0.9	帶黃茶褐色	1.8	2.0	2.2	2.4	復原 49.0
22	*	円	24.8~27.0	10.9~14.9	2.0~1.1	灰褐色(スエ)	2.3	2.2	2.3	2.2	復原 46.5
21	*	円	25.1~27.5	10.9~13.3	1.2	帶赤褐色	2.2	2.1	2.5	2.3	復原 49.5
20	*	円	10.2~12.4	1.1		灰褐色(スエ)	2.25	不明	不明	不明	*
19	*	円	11.2~14.5	1.4		帶黄褐色	2.2	2.6	2.1	不明	*
18	*	円	13.2~15.2	1.5~1.2	*	*	2.1	2.3	不明	不明	*
17	*	円	12.4~15.0	1.43		灰褐色(スエ)	2.2	不明	不明	不明	*
16	*	円	9.3~12.1	1.3		灰褐色(スエ)	2.2	不明	不明	不明	*
15	*	円	24.0~26.0	11.2~13.2	1.0	帶黄茶褐色	2.2	2.4	2.8	2.3	復原 50.5
14	*	円	30.0~32.5	11.2~13.8	1.3~1.05	*	2.0	2.1	1.8	2.1	復原 48.8
13	*	円	25.9~28.0	9.9~12.0	1.08	*	2.2	2.9	2.4	2.2	復原 50.0
12	*	円	27.5~29.5	12.0~14.0	1.0	*	2.2	2.3	2.0	2.6	復原 49.6
11	*	朝顔	32.0~34.0	不 明	1.0	黄褐色	不明	2.1	2.6	④ 2.8 ⑤ 3.1	復原 40.5
10	*	円	9.8~13.6	1.9~0.7	*	2.3	2.1	不明	不明	*	
9	*	円	11.0~13.0	1.0	*	1.8	2.2	1.9	不明	*	
8	擾乱されている	円				*					復原不能
7	*	円				*					*
6	*	朝顔				赤褐色					*
5	下部位置	円				帶黄赤褐色					復原可
4	少破片出土	円			1.0	*					*
3	下部確認	円	10.5~14.7	1.0		灰褐色(スエ)	2.2	2.2			*
2	*	円			1.4	帶黄赤褐色					*
E 1	下部位置		13.6~16.4	2.1~1.3		灰褐色(スエ)	2.1	2.0	2.0		*

Fig18 前方部埴輪実測図

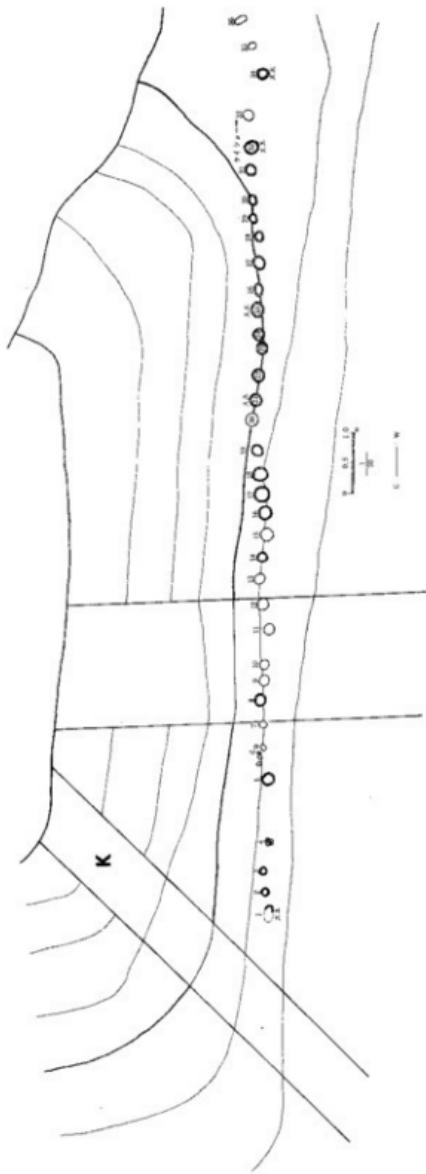


Fig 19

Kトレンチ断面図



Lトレンチ断面図

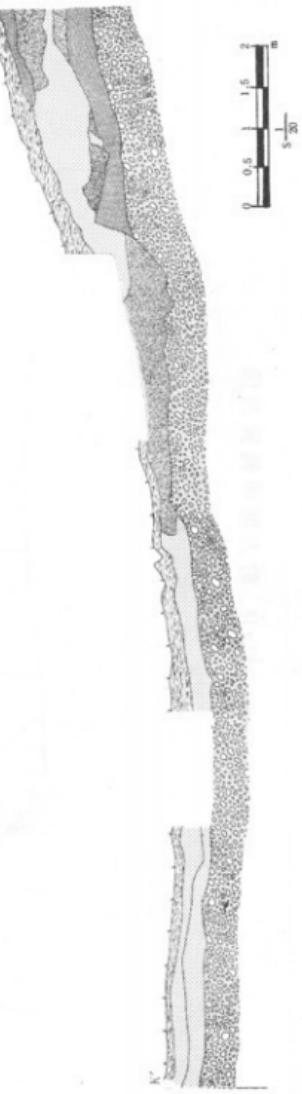


Fig 20 塗 輪 実 測 図

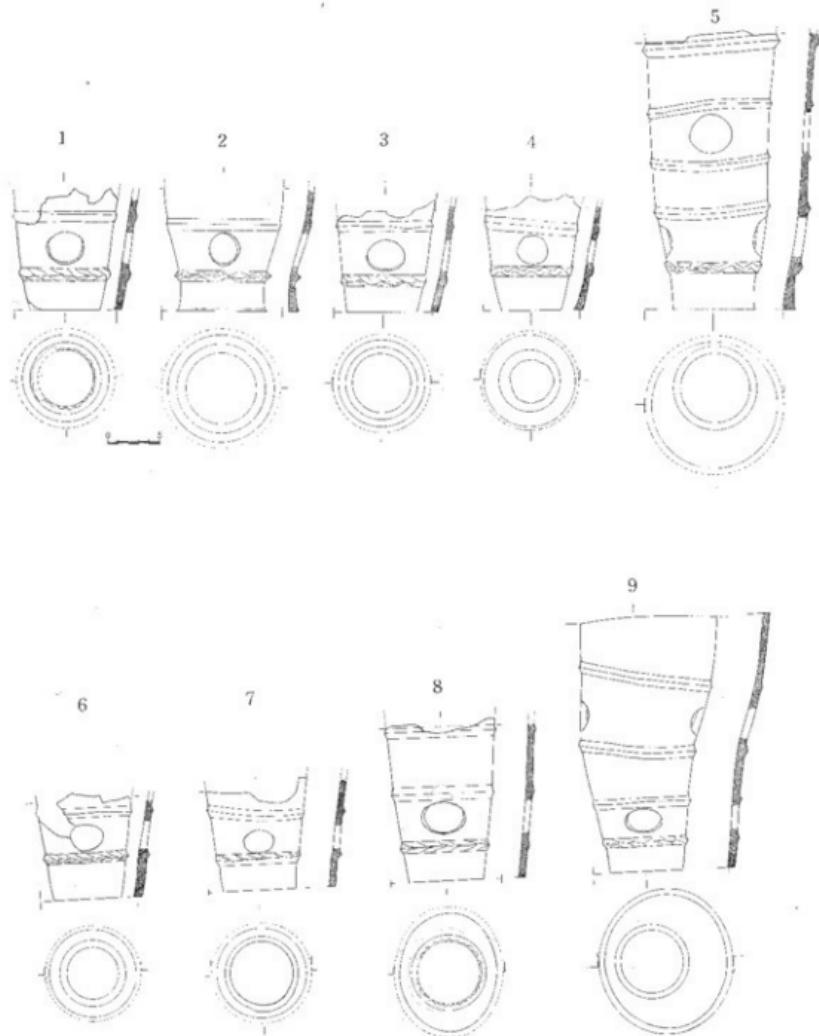
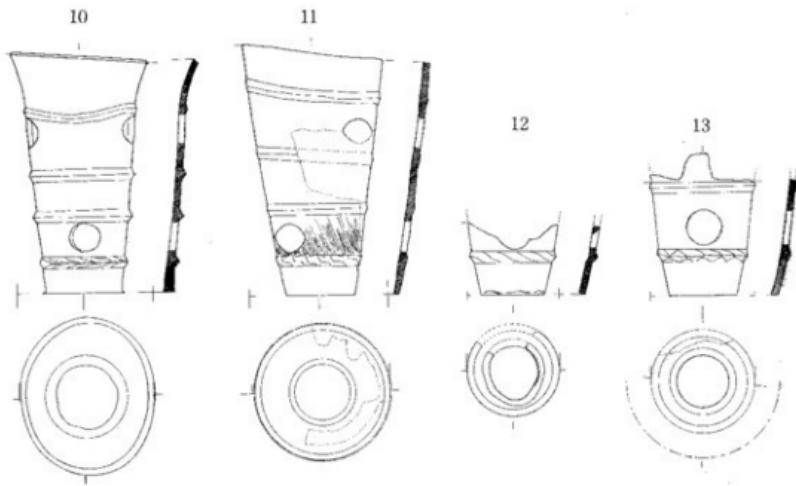
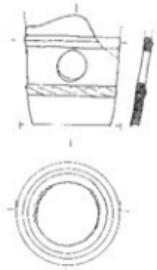


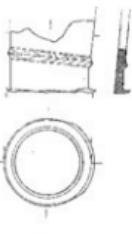
Fig 21



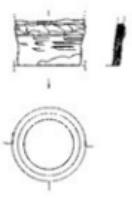
14



15



16



17

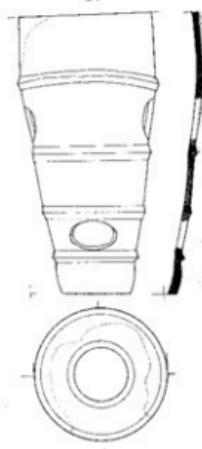
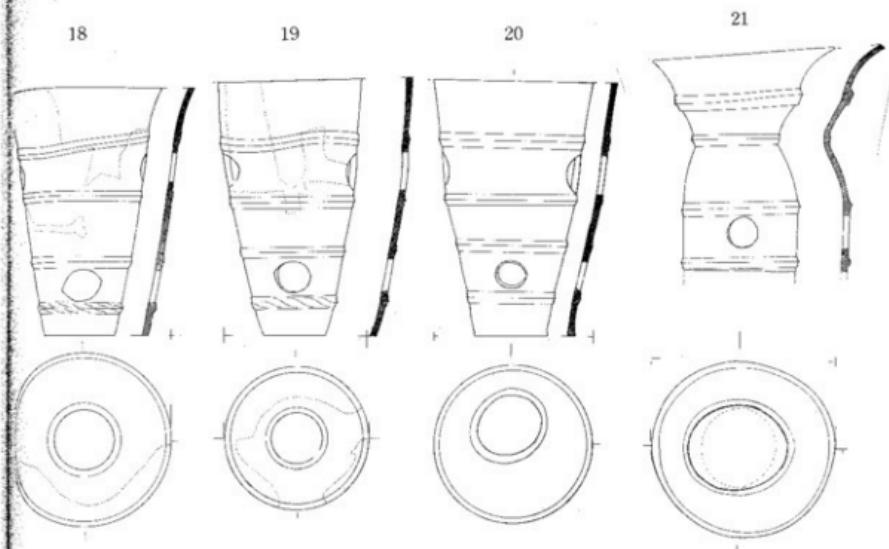


Fig 22



22

23

24

25

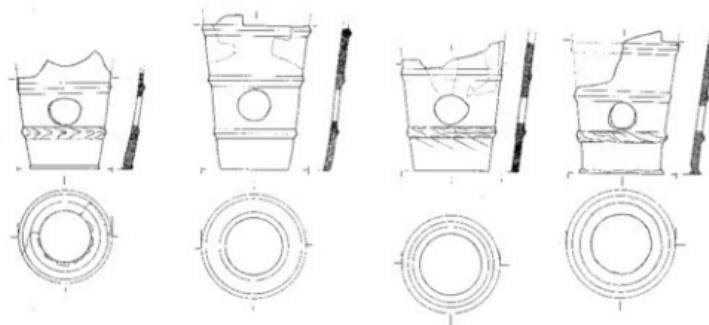


Fig 24 形象埴輪片実測図

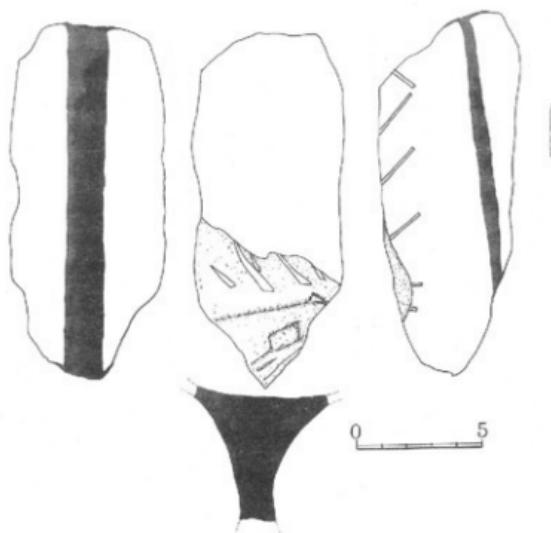
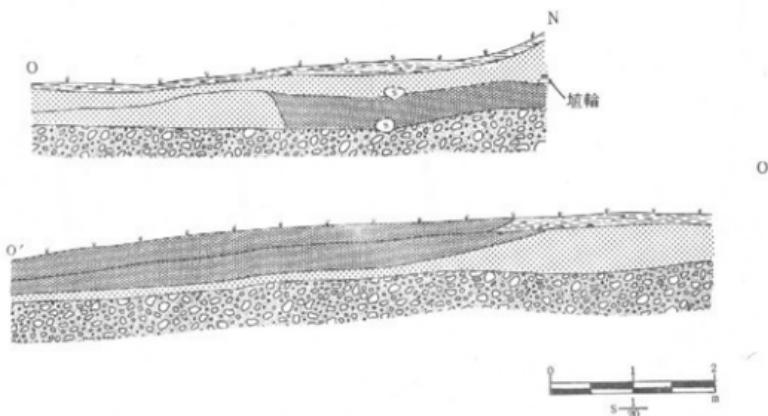


Fig 25 N・Oトレンチ断面図



III 墳丘封土の構築

[1] 後円部墳丘封土の構築

後円部墳丘封土の堆積状態はFig. 17に示されているとおりである。

後円部墳丘上での堆積地層断面を観察した結果からすると、墳丘頂上部の第二次遺構の発見された位置では、E～E'、F～F'にみられるごとく、遺構をはさむ上下層の堆積状態は、疊き締めによって堅牢性を有し安定している。しかし、これらの周囲は種々の土壤が不規則に堆積された状態を示している。それが特に顯著にみられるのが前方部との接觸地帯である。

第二次遺構の下部、すなわち、横穴式石室の発見された上部の構築は、盤築の手法を採用していることが伺える。表土下には黒褐色土層、赤褐色山土層が画然と層をなし、それらは石室上を包蔵するかのごとくアーチ状をなしている。これらの地層中には、茶褐色や黒色火山灰土がブロック状に混入している。いずれの層も疊き締めによってかためられている。

石室の天井石上部を被覆する赤褐色粘質土層中には、さらに厚さ約5cmの乳白色の良質粘土がアーチ状をなして堆積するなど、石室上部を覆う構築は有意的なものである。石室の側壁外部も粘土の疊き締めによって構築されている。これは、穹窿状の石室を構築するまでの作業工程を伺い示す以外の何ものでもない。

後円部の石室を被覆する客土による盤築は、細心の注意をはらっている。そのことは客土の質的な面からも理解することができる。前方部において用いられている黒色火山灰土が石室周辺にはほとんど用いられていない、粘質性を有する土壤を多用していることからも明らかである。後円部の外縁付近は、石室周辺と比較するとその堆積状態は乱れており、石室の被覆部のみに構築の重点が置かれたことは否めない事実である。

[2] 前方部墳丘封土の構築

前方部の外観上の形状についてはすでに触れているので省略し、ここでは墳丘封土の構築状態についてのみ説明してみたい。

前方部には合計4本のトレンチを入れて調査を実施した。さらに土地造成による破壊に先立ち、前方部中央をほど東西にブルドーザーで切断した。この切断した地層断面図をも参考にして以下述べることにする。

まず、前方部の北縁線に沿って13mのKトレンチを入れた。その結果、Kトレンチ北端より6.5mまでの範囲は表土層、第Ⅱ層（茶褐色土）、第Ⅲ層の地山（赤褐色粘質土）とも、いずれも地層は水平に走行し極めて安定しており、客土による堆積も認められず、墳丘とは直接関係しない地域であることが判明した。それとともに周濠を伺がわしめる遺構等も全く認めることができなかった。6.5mからは第Ⅳ層の茶褐色土層は消滅し、これにかわって黒色火山灰土の客土があらわれた。このことは、第Ⅴ層の地山において20～25cmの傾斜を有する段があるこ

と、考えあわすと、黒色火山灰土層の北端が前方部墳丘端であると推定することが可能である。

Kトレンチの観察結果からすると、赤褐色粘質土の地山の基盤面上に、黒色火山灰土、黒褐色土、茶褐色土層を帶状に、かつ水平状態に客土によって堆積している。しかし、疊き締めの状態ではなく、ごく自然の堆積状態であった。

前方部中央から、主軸方向に沿って北に延びるNトレンチの観察結果は、前方部中心点より8mの地点で地層の変化が認められた。8mの地点より外縁部は、Kトレンチと同様に表土層、茶褐色土層、それに赤褐色の地山面にと統いており、安定した地層を有している。特にNトレンチは、周濠の存否を確認するため、前方部中心点より28mまで延長してみた。途中巨木の根跡で、地層を明らかにすることのできなかった地域もあったが、地山面上には周濠の遺存した痕跡すら認めることができなかった。

地層の変化が認められた地点以内は第Ⅱ層と地山面の間に約30cmの厚さで黒色火山灰土の混入した黒褐色土層があらわれていた。この黒褐色土層の内側1mの場所に2個の河原石(15×12×13cm)が、この層を上下からはきむごとく置れていた。これを墓石の一部とみなすには他の河原石の出土がないことから考えていさゝか無理である。この河原石が、主軸線上の赤褐色地山面の傾斜変換点となっていることから、古墳構築の際の標識的役割を有したものではないかと考えられなくはないが、発掘によってこれを明らかにすることはできなかった。円筒埴輪は、墳丘端より150cm内側の黒褐色土層中に立てられていた。円筒埴輪の内部墳丘側は、その傾斜が一段と急になっているが、封土は黒色火山土のみで、それも厚く堆積されていた。

後円部と前方部の接触地帯から、前方部東北部に向って斜走する1トレンチを入れた。この地層の観察結果は前者の両トレンチとほぼ同じ結果であった。

前方部の前面の円筒埴輪列の存在する地帯に、ほど東西に走行するLトレンチを入れた。この結果を簡単に記してみたい。Lトレンチは前方部の北陵線沿いのKトレンチより西陵線付近に至る14mのトレンチである。西陵線上まで延長しなかったのは、台風による樹木倒壊のため捲乱が激しく、トレンチが不可能であったからである。なおこのLトレンチ中にも巨木根が3個あり、この地点の地層は明らかにことができなかつた。

円筒埴輪列は前方部の頂上から3mの斜面中から発見された。この斜面の表土層は50~55cmで、黒褐色土層からなっている。円筒埴輪列はいずれもこの表土層の最下部に近い面を基盤として立てられていた。この黒褐色土層下には茶褐色の粘土層がバンド状に1~2列はさまれた状態で確認された。一部この粘土層が欠失している所もみられた。

この茶褐色粘土層下は、25~40cmの黒色火山灰土層となり、統いてその下限が第Ⅲ層の赤褐色地山面となっている。赤褐色地山面はほど水平であり、この赤褐色土層面が墳丘の基盤面であることはほとんど間違いない。

この基盤面の赤褐色土層上に黒色火山灰土を客土して堆積し、その上部に茶褐色粘土をバンド状に堆積している。この茶褐色粘土層は、明らかに円筒埴輪列を設置するための基礎固めの役割を有するものである。この粘土層は黒色火山灰土層中に埋没してしまう円筒埴輪を安定さす

ためのものもある。このことは茶褐色粘土層に円筒埴輪を押圧した際の圧痕が認められるごとや、更に円筒埴輪底部に粘土が詰められた状態で遺存したことからも伺える。

円筒埴輪列の内側から上部にかけては黒褐色土層が堆積され、安定度を増すようになっている

前方部中央を東西に切断した地層断面は、PL.71に示されているごとく、基盤面は赤褐色粘質土の地山で、それも平坦面を有している。この上部に、主として黒色火山灰土を堆積している。この黒色火山灰土層には鱗状に赤褐色粘土質の山土地が混入していた。

以上が前方部の各トレンチに表われた客土による構築の模様である。

これらのことから、洪積台地の舌状部を平坦に整地したのち埴丘を構築したことが伺える。前方部の埴丘端部分から円筒埴輪列の周辺部においては、黒色火山灰土とともに黒褐色土や茶褐色山土地が規則正しく交互に堆積されている。これは、埴丘の形状を保つ対策としての盤築方法であるといえる。

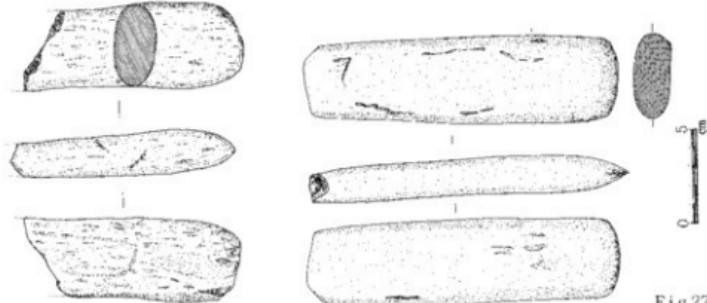
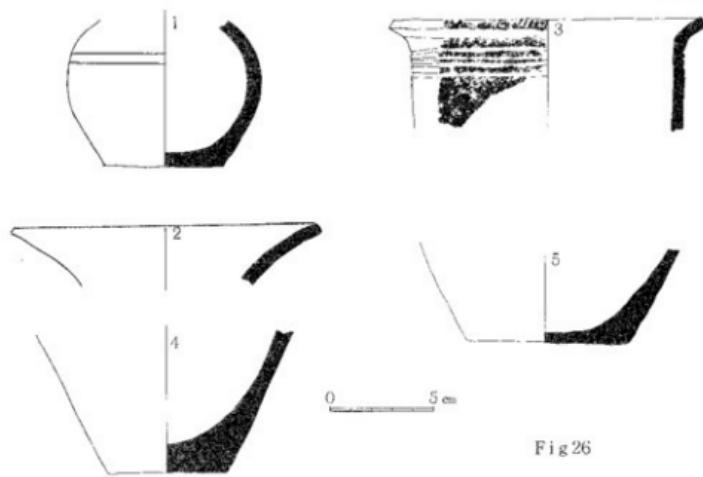
円筒埴輪列も、たゞ単に列状に立てられているだけではなく、粘土によって基盤面に固定されるように工夫されていることは、埴丘の土砂崩壊を防ぐ目的を持ったものといいえるのではなかろうか。特に円筒埴輪列内が、雨水の浸食を受けやすい黒色火山灰土である点も重要な意味を持つであろう。

後円部が一部黒色火山灰土を含むも、粘土や山土地を多用し、更に岐き締め手法によって盤築されているのは、石室の被覆並びに石室の崩壊を防ぐ意味を持っているからであり、それゆえ綿密かつ堅牢に構築されているといえる。これに対し、前方部は明らかに後円部よりも労力の省略がおこなわれている。たゞ形状を得るための客土による堆積をしたに過ぎない。勿論、周辺部には形状を得るために若干の盤築の配慮がなされているものの、その客土のほとんどが黒色火山灰土である点は、客土運搬に要する労力の軽減が意図的におこなわれている。それは粘土や山上地に比較して、火山灰土は軽く運搬に便利であるからに他ならない。しかし、すべてを雨水の浸食に弱い黒色火山灰土で構築するには問題があるため、これに一部赤褐色の山上地を混入して地盤の安定を保っている。

前方部中央の切断面にあらわされた鱗状の山土地の混入がこれであろう。この鱗状の堆積状態は、客土の運搬の手段、方法をあらわしているといつてもあながち過言ではなかろう。すなわち、これらの山上地や、黒色火山灰土の一塊の量がモッコー1杯分に相当することや、鱗状に堆積することからも伺い知ることが可能である。客土の量そのものは黒色火山灰土に比し赤褐色山土地が極度に少ない点、山上地が黒色火山灰土を固定化させるための地盤の安定剤として用いられたものといえなくもない。

円筒埴輪が、後円部埴丘上にも一部認められるといえども、その分布が前方部の周間に多く集中して出土したこと、この火山灰土利用と全く無関係ではないと考えられる。

項 客土中よりの出土遺物実測図



三島神社古墳をめぐる主な古墳実測図

Fig 28 三島神社古墳

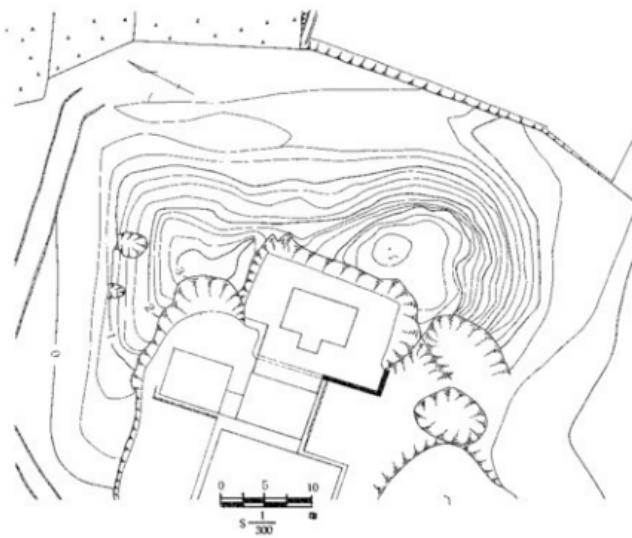


Fig 29 経石山古墳

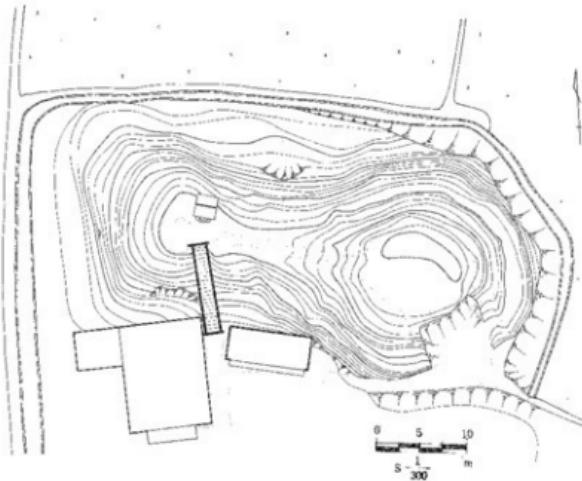
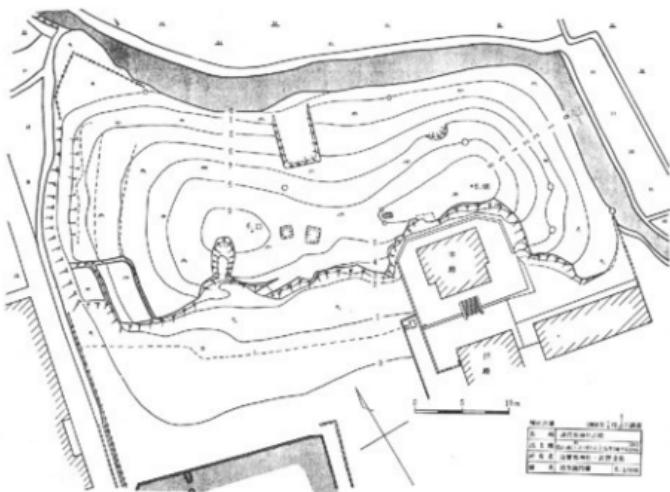


Fig 30 波賀部神社古墳



XIII 墳丘客土中よりの出土遺物

前方後円墳の墳丘の客土中に、前時代の遺物が若干包含されていた。これらは当古墳そのものに直接関連ある遺物ではないが、一応今後の考古学的な参考資料ともなるのでここに書き留めておきたい。

まず墳丘築造の客土は、どの地域から運ばれてきたのかの問題が提起されるであろう。しかし残念ながら、その地域を明瞭に指摘することは、土壤の分析に係る緻密な土壤分布図が作製されていない状況下では不可能であるといえる。しいてそれを指摘しようとするならば、その客土の粘性度、腐植度、色調ないしは母岩の性質等からみる以外に方法はない。客土そのものは墳丘築造に伴なう労力の負担軽減を極力行なったという前提に立つならば、古墳建設場所の近辺にそれを求めるのが最も自然ではなかろうか。すなわち、後円部と前方部のくびれ部分から、前方部にかけて搬入堆積している黒色の火山灰土層（黒色ローム層）は、三島神社古墳の存在するお茶屋台地上や、浅い開折谷に流入堆積している黒色ロームを利用したものではなかろ

うか。この浅い開折谷そのものも、古墳築造の土砂の供給地的役割を果し、それによって一段と開折作用が促進されたものと考えられる。

赤褐色ないしは赤色の山土は和泉砂岩が主として風化したもので、古墳の立地するお茶屋台地に分布しており、これを利用したものとみられる。

〔1〕縄文時代の遺物

縄文時代の遺物とみられるものは、縄文式土器 2、石鎌 1 と石斧 1 である。いずれも客土中の黒色ローム層中から出土している点にその出土の共通性が認められる。

(1) 縄文式土器 (Fig 25の1～2)

縄文式土器は、網片が 2 片ばかりであり、それゆえ器形全体を伺い知ることはできない。2 片とも A トレンチ中の黒色ローム層中から出土している。1 は深鉢形七器の口縁部とみとめられるもので、口縁部は直立しており、器壁の表、裏面ともこれといった特徴ある文様はない。たゞ表面に一部条痕文ではないかとみられるものが残存しているのみである。丸みを帯びた口唇端には棒状用具による凹文が連続して施文されている。2 は薄い条痕文が施文されているに過ぎない。これらはいずれも焼成度は良く、胎土中には僅かではあるが石英粒を含み、色調は褐色を呈する。

(2) 石 鎌 (Fig 26の1)

石鎌は前方部の頂上付近の表土層である黒色ローム層中から出土したものである。石質は黒曜石で、尖頭部、刃部ともに緻密に剥離調整されており、基部は四基式である。

(3) 石 斧 (Fig 26の2～Fig 27の1・2)

完全な磨製石斧が 1 個と、石斧として利用されたものではないかとみられる石棒状の石器が 2 個出土している。これらの石斧ないしはそれに類似する石器は、いずれも単独で出土しており時代を完全にとらえることには、いさゝか無理がある。便宜上一応縄文時代のものとして理解して説明を加えたい。

Fig 25の2 は完全な磨製石斧で、前方部の歴線に近い東斜面中の地表下約 1.5 m の黒色ローム層中からこれのみが単独で出土した。石質は緑泥片岩であり、全長 17 cm、刃幅 4.2 cm の所謂短柄型の石斧である。刃部は勿論のこと、全面が研磨されている。他の 2 個は緑泥片岩と石墨片岩であり、加工痕は認められずすべて自然面である。それゆえ石斧と速断するにはやゝ問題を含んでいるといえる。

しかし、頭頂部が欠失し、刃部に相当する部分に使用痕が認められることから、何らかの道具に使用していたものと考えて差しつかえない。これらは縄文後期の松山市上野遺跡出土のものと共に通する性質を有している。

墳丘上から出土した縄文式土器は僅か 2 片であるため、詳細な点は不明である。しかし、条

痕文を有し口唇端に連続する凹文が施されている土器は、六軒家Ⅱ遺跡出土の土器にその類似性を認めることができる。六軒家Ⅱ遺跡出土の土器は中国地方の中津式土器の影響を強く受けたものといわれていることから、この六軒家Ⅱ遺跡出土の六軒家式土器であるといえる。それゆえ、当古墳の客土中から出土した縄文式土器は縄文時代の後期初頭に位置づけられるものである。

なお、石鎚もこれら土器に伴なったものと理解することができよう。石鎚に利用されている九州姫島産の黒曜石は愛媛県下の縄文後期前半の土器に普遍的に伴出している。このことから、この時期においては、豊後水道を隔てた東九州との交易もかなり盛んにおこなわれていたものと推測されうる。

〔2〕弥生時代の遺物

弥生時代の遺物としては、弥生式土器が5点ほど出土しているだけで、他の遺物は出土していない。出土した弥生式土器も一括して検出されたものではなく、墳丘全体から単独で発見されている。これらの弥生式土器は、前記の縄文時代の遺物が黒色ローム層からなのに対し、赤褐色ないしは赤色の山土の客土中から出土している。以上のことから、それぞれの客土は別の地域から搬入されたものであることが想像できよう。以下弥生式土器について述べてみよう。

（1）壺形土器

壺形土器とみられるものが2個出土している。それぞれ器形が相違するので二つに分類したい。

① 第一類土器（Fig. 26の1）

この壺形土器は、後円部の墳頂近くの東斜面の地表下約1mの赤褐色の山土中から出土したものである。壺形土器は頸部以下であり、頸部から口縁部にかけての上部は欠失している。胴部の最大径は9cm、底径5.7cmと非常に小形品であり、上胴部に沈線が2本平行横走している。

胴部から底部にかけては所謂玉忽形に絞られている。底部は平底である。焼成度は極度に悪く、胎土中に微細な石英粒を多く含み、色調は淡褐色を呈する。

② 第二類土器（Fig. 26の2）

Aトレンチの赤褐色山土中より出土したものであり、口縁部の一断片である。口縁部が大きく漏斗状に外反している。口縁部、口唇部には何んら施文手法は認められず、口唇端は切り立っている。焼成度、色調、胎土等は第一類の土器と同一である。

（2）壺形土器（Fig. 26の3）

壺形土器は、Aトレンチの赤褐色山土中から出土したものである。口径は推定15cmで、口縁部が小さくゆるやかに外反している。その外反する口縁端には斜走する竈状用具による刻目文が連続して施文されている。頸部に相当する部分に4本の竈状用具による沈線文が横走している。

胴部の膨らみは認められず円筒状に近い状態である。形態ならびに施文手法は、阿方式土器の壺形土器そのものである。色調は濃暗褐色で、焼成はやや悪い。

(3) 土器底部 (Fig 26の4～5)

比較的明瞭な底部が2個体出土している。4は壺形土器に近いものの底部で、Aトレンチ中より出土している。底径は6cmで平底である。5は前者に比べてやや薄手であり、同じくAトレンチより出土している。底径8cmで平底である。底部の側面の曲線の状態から壺形土器に近いもの、底部ではなかろうか。これらはともに焼成度は悪く、胎土中には石英粒が極度に多く混入している。特に土器内面は全体に石英粒が浮き出ている。色調は黒褐色で一部赤褐色を呈する。

以上の弥生式土器は、その資料が寡少であるため、その縦年代的位置づけは苦しい。しかし、小形壺形土器の形態ならびに施文手法は、前期前半の宇和町金比羅山出土の重弧文を有する壺形土器や、松山市持田出土の木葉文を有する壺形土器の影響を多分に受けついでおり、これらに後続する前期後半に属する土器であろう。第二類の壺形土器は、阿方式の壺形土器の口縁部に共通性を持っている。

壺形土器は阿方式土器そのものであり、壺形土器とも同時期のもので、北四国地方における弥生前期後半に位置づけられている、阿方式土器に併行する土器群であろう。

なお、阿方式土器の壺形土器、壺形土器の施文による沈線文の施文手法は、先行する金比羅山や、宇和町西狭間里出土の重弧文、持田の木葉文にその素因を求めることがきよう。

墳丘の客土中から繩文、弥生時代の遺物が発見されているので、その客土の供給地さえ判明すれば、そこにこれらに関係する遺跡が発見されると思う。今後その解明への努力をしたいと考えている。

主な参考文献

1, 今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告	1970	福岡県教育委員会
2, 南河内石川流域における古墳の調査報告第22輯	1970	大阪府教育委員会
3, 加古川市天坊山古墳（加古川市文化財報査報告5）	1970, 6	加古川市教育委員会
4, 近藤義郎、藤沢長治著 [日本の考古学IV, V古墳時代]		河出書房
5, 上田 宏範著 [前方後円墳]		学生社
6, 末永 雅雄著 [古 墓]		学生社
7, 岡本 健児著 [高知県の考古学]		吉川弘文館
8, 岡本 健児著 [郷土考古学叢書]		吉川弘文館
9, 大場 盆雄著 [原史文化（上）弥生文化]		雄山閣版
10, タ [原史文化（上）遺構・遺跡]	タ	
11, タ [原史文化（下）古墳文化]	タ	
12, タ [原史文化（下）遺物]	タ	
13, タ [特 論（上）祭祀・信仰]	タ	
14, 斎藤 忠著 [日本古墳文化の研究]		吉川弘文館

XIV 三島神社古墳をめぐるシンポジウム

出席者 森光晴調査主任 長井數秋 柳原多美雄 野口光敏 八木繁一 山本四郎

平松康毅 司会 松本清調査事務局長

司会 今日はお忙しいところをご苦労でございます。いろいろとお骨折りをいただいた三島神社古墳の発掘も終り、その後の調査整理も順調に進められておりますが、ご承知のように市当局としても、この貴重な文化財をはじめ、他の文化財についても同様にできる限り保存したいと願って努力してまいりましたが、何分にもご案内のような事情により次第の策として発掘調査にふみ切り、現在に至ったのであります。

今日はその経過報告をかね、さらに本墳のもつ問題点を究明する意味をもって先生方にご出席を願ったのであります、よろしくお願ひいたします。

そこで、まず本墳のもつ時代的な点についてお話しを願いたいと思います。

主任 本墳の墳丘からすれば、市指定当初に調査報告されているように古墳造成期の初期に属すると見られていたのですが、発掘により時代がかなり下り6世紀中葉になりはしないかと考えています。

柳原 墳丘の形態からすれば、三島神社も経石山古墳も前方後円墳でどちらも同時期ではないですか。

長井 古墳の立地条件から見れば、現存の経石山古墳が少し先につくられ、その後、経石山の西側に面する場所や、三島神社古墳が造られたのではないであろうか。

平松 立地条件は別として、われわれはやはり古式の古墳という立場に立って調査をすめました。特にそのためにグリット方式（墳丘全体に網をかけた状態）を取って慎重に発掘を進めたのですが、時代はやはり6世紀頃になります。

司会 発掘のほうに話題がむいたようですが、内部構造などから見ての時期はどうですか。

平松 古式の古墳の場合は、石室をともなわないという考え方方に立っておりますが、石室を持った場合は堅穴石室か粘土棺を考えられます。

発掘作業を進めるうちに粘土塊を発見し、われわれはこれを粘土棺と見て慎重に進めたのですが、後になって粘土塊（第二次遺構）としました。

長井 上体部すなわち石室の構造から見れば横穴式石室であり、後期に属するが、石材から見れば、小口積であり、後期でも初頭か前半にさかのぼると思う。

主任 墳丘から見れば前方後円墳であり、近畿地方に例をとれば古式の4世紀から下っても5世紀中葉までと見られるが、内部構造からすれば後期古墳として考えられ、そこ

で6世紀中葉前後に時期を取りました。

野口 私も後期古墳説に賛成です。前方後円墳における地方的なものを考慮してみて、時代をきめる手がかりになる出土遺物にはどのようなものがありますか。

司会 そうですね、このあたりで出土遺物から見た時代はどうですか。

主任 本墳での遺物の出土は非常に少なく、中でも時代を決めるための須恵器の出土は、器台の脚部と腋のU縫部が玄室内部の唯一の出土遺物ですが、墳丘からは土師片の出土もあります。

野口 その他にどのようなものが出土しましたか。

主任 ガラス製の玉類は実に多く合計で1,000個を越しますね。その他に特色として、滑石岩質の有孔製品とか、白玉、空玉、管玉、鈴等がありました。

長井 以前に発掘調査をした、相ノ谷前方後円墳の土器とくらべると、あきらかに時代は下りますね。

平松 後円部の墳丘より出土した土師器は特に下り、平安期頃まで下らないですか。なお墳丘の二次的な構造と土師器等から、民俗学的にどのようなことがいえますか。

野口 久米の国造の墓かどうかわからないが、何か祭り事をしていたのでは。

主任 AトレンチやBトレンチの後円部での配石等から見て、何かわたくしたちもそのような推論をしています。

長井 土師器からして、平安期の初期ぐらいまで古墳での祭りが行なわれていたのではないかでしょうか。

柳原 私はもっと祭り事は続いていると思う。

主任 須恵器については、大山正風君の実測によると、やはり6世紀の中葉頃が妥当ではないかと言っていますね。

野口 鈴に類似するものが出土しているが、あれはからだにつけるものでしょうか。出土状況は説明されたが、すねの下のあたりの大きさになるようだ。それなら「足結いの小鈴」であるようと思う。服装史的にみて非常に興味があります。そこで直感的に言うと、この古墳が包蔵している文化は、近畿からはいってきたと考えられます。そうみると、時代は下がりますね。

司会 いままで本墳の時代的なことについて話してきましたが、このあたりで本墳にあらわれた特徴について、すでにいくらか出ていますが、進めたいと思います。

まず墳丘の築造方法についてはどうですか。

主任 さきほど一部ふれたように、後円部の特に玄室の上部にあたる所に、環状の配石があり、石室の築造後になんらかの行為がなされたかに思われることです。さらに、配石の下は粘土による意図的な封土がなされていることがあります。この後円部の築

造後、前方部の封土作業が行なわれたことが断面図からも明らかであり、粘土質の土壤と、ローム（火山灰土）の交互に盛り土がなされ、古墳地域の基盤の地山はや、後円部に向いてゆるい傾斜をしていることがあります。

長 井 墳丘における配石にも土師器をともなっており、また前方部の上師器の出土などはいずれも祭祀遺構であるか、または祭祀行為がおこなわれたものと見たいです。

野 口 たしか祭をしたのでしょうか。仏教以前の原始的宗教行事と見てもよい。

平 松 非常にめずらしい発見だと思います。前例（報告書）がないためなんともいえないが、ただ古式古墳ということで、慎重にグリット調査したことにあるのではないかと思うとうれしいです。

司 会 墳丘の配石は特記すべきことになりますね。

主 任 特記すべきことです。今後、他地方の報告書等にも、特に注意しておきないと思います。

司 会 石室内の構造について、特筆すべきことはないですか。

長 井 石室内の構造は、本文にふれたとおりですが、穹窿形（アーチ形）に壁面が張り出されており、その技法も自然石を利用したのですが、天井石や墳丘圧を計算した、すぐれた築造であるといえます。

山 本 自然石の利用による古墳が、この周辺には多いのですか。

柳 原 小野や久米地方の古墳も自然石が多いようです。

主 任 東野や久米地方の頂上附近の円墳には、割石によるものもあります。

長 井 他の古墳の築造は、アーチ式のものより直立のものが多いですね。

野 口 室内はベンガラか朱が塗られていたのではないですか。

山 本 あれはすべてベンガラでした。分析すればすぐ判明するものです。

司 会 それは分析の結果ですね。

山 本 そうです。ベンガラです。費用と入手の方法等からも考えられますね。朱は非常に高価で、また入手しにくいと考えられますからね。

平 松 築造方法からして、6世紀初頭に上限をおくことができると思います。

司 会 排水溝がありましたね。あれはどうですか。

主 任 暗渠排水の施設をしていたのです。形式的なものではなく、充分排水機能をそなえたものです。

野 口 疾道や排水溝からして、追葬は考えられますか。

主 任 考えづらいですね。

長 井 横穴式石室そのものは追葬を考えた構築ではあるが、閉塞手法や、疾道の長さからして追葬は不可能といえます。被葬者を2人とすれば同時葬としたい。

平 松 私も同感ですね。それよりも單一葬とも考えられる。

主 任 室内がすでに盗掘されているので、明確にはできないが、出土の状況からすれば、あるいは、單一葬かまたは同時葬かも知れないが、追葬はやはりむりですね。

柳 原 以前に芝が峰の古墳では重葬があり、確かに追葬でしたね。

主 任 排水溝の施設のある古墳は、本墳の他に北条市にも発見されているが、それについてのたしかな記録はないが、目撃者があり、その人の言うには本墳とまったく同じであったと言っていましたね。

司 会 排水溝については、いろいろあると思うが、この調査に合せ考えたいのですが、経石山の外にこの地方の前方後円墳の分布はどうなっていますか。

野 口 北高井の波賀部神社も前方後円墳ですよ。市指定になっていますね。

柳 原 この他に久米に双子塚があり、また川内町の川上神社の古墳も同じです。近くには200m離れた、池にもありましたよ。今は川上神社以外はなくなっています。

長 井 池の周辺にあったことは、航空写真でその遺構がしのばれますね。

野 口 民俗学的にもお茶屋台から桑原、久米平井一円はこれから研究に必要なところであります、特に興味がありますね。

一 同 今後の研究に大いに気炎をあげる。

主 任 最後になりましたが、墳丘のシイの木の年輪は何年ぐらい経ているのでしょうか。

八 木 確実に見ていないのでいえません。だがそういう年輪であることはいえますね。ただここで文化財の内に天然記念物として保存している樹木があるが、これもよる年なみに枯れるものです。そのためにもしっかりした保存対策と、また生態的に、また動態的にも保護不可能の場合、確実に記録保存をすることも是非必要であり、単なる保護を呼び破壊されている文化財の多いことも十分に今後の課題としたいものです。

司 会 さきの三島神社総代会で桑原八幡神社境内にこの古墳の石室部分を復元することに決ったそうですが、この復元作業をすることにより、石室の石積の方法などもくわしくわかり、よい経験と記録もとれると思います。また市の中心部に近いところがあるので、埋蔵文化財の实物教育に役立つと思う。長時間どうもありがとうございました。

(この他にも話題が本県の文化財にもふれてきたのですが、紙面の都合で割愛したことをお許し願います)

XV 結語

調査により本墳の特筆すべき、若干の問題点を提示することで結びに換えたい。

(1) 墳丘の築造について

古墳の地理的条件については、本論でふれたが、それ以外について、1~2の考察をすれば、まず墳丘の封土作業を2つに大別し得る。

A 後円部で主体部を中心とする一盤築についてである。洪積台地を平面プランとして盤築が行なわれている。すなわち腐植土（ボトゾール）を除去した後に、玄室の築造とともに、その玄室部周辺に山上（赤褐色粘土）の粘土質を利用した。盤築が雨水の浸透と主体部の補強（強じん性）を考えての作業がなされていることと、さらに羨道部を含め、同一の土質粘土による盤築である。

後円部の主体部の築造と、その周辺の盤がほぼ完成をみた時点において、Fig 6（墳丘内部の配石）に見られる遺構が行なわれていた。明らかに玄室部を示す配石と主体部の外因を示す位置に意図的な配石を見たことである。この配石の外周の位置より、や・上面を平面に調整された粘土塊を確認した。（これを第二次遺構と呼ぶものであるが）、本墳における調査で特に留意した遺構でもある。この遺構は主体部の盤築とは層位の上でも区別されるものであったが、主体部におけるA-2においての配石とは、何等かの関係をもつものと考えた。

B 前方部の築造については、盤築とは認めがたい方法による築造方法に特に注目した。後円部と主軸をなす地点の延長地点に配石があった。この布石を葺石と見るにはあまりにも微数であった。このことから葺石ではなく、本墳の兆域を決定する目標石であったと見ることが妥当であろう。さらに前方部のセンター-3mにおいて円筒埴輪列を確認した地点においては、赤褐色の粘土質土壤を確認しており、その他の前方部の封土については、赤褐色粘土と黒灰色土壤（火山灰土）との交互に盛土をしたと見えるウロコ状の築造を示している。この築造は作業の能率を高めるための方法によったものではなかろうか。古墳の西方100mに堆積する開折谷の火山灰土と洪積台地の粘土の搬入とによって、ローム層の保護的な役割をはたしたものと考えたい。また労力的にも相當に節約できたものと考える。

(2) 羨道部と墳丘築造との関係

羨道部と墳丘との関係について1~2の問題にそぐうした。すなわち、墳丘に対してあまりにも羨道が短で、しかも盤築が一連の作業行程によっている。このことから

A 排水溝施設と排水溝の曲折について、色々推論したものであるが、排水溝両側壁面での断面は、いずれも玄室部・羨道部・閉塞部を含め、いずれも同質の粘土を利用しておらず、しかも盤築が行なわれていることを認めた。このことは築造が同時になされたと見ることの方がより妥当である。閉塞は特に入念に行なわれたとは思えないが、や・上質の粘土を利用してのことと、排水溝の折曲する地点まで暗渠溝として粘土が使用されている。その上層は、

主体部同様に赤褐色のブロック状の粘土層で被覆されている。

以上の事実から、主体部と排水溝の曲折点までの行程は同一行程の内で実施されたものを見る。ただ玄室上の盤築には赤褐色土壌のや、中間的な位置に粘土による被覆効果を高めるための粘土によるベルト状の層状を確認している。

- B 墳丘内部の配りと墳丘の築造過程から考えるとき、玄室内部の石組と盤築とは前述の方法にたよったとみるが、犬井石の架構がなされた後で粘土による日地詰がほどこされ、その上部に赤褐色の粘土でさらに盤築を行ない、その後により上質の粘土で主体部全面に封土して雨水の浸透を防いでいる。この上質粘土の上に前述の赤褐色粘土がふみしめられている。以上の封土は、平面プランではなく、主体部中央に向かって漸進的に比高を増し、ドウム状の封土となっており、中央部と主体部外周辺との比は80cmを越える比高を示している。この上に、環状列石の二重の遺構があり、北東部との粘土塊による遺構とは、何等かの関係があると見るとき、おのずと祭祀跡としての機能を推論する。

- C 主体部の盤築後の墳丘築造は、急ピッチで行なわれたと考えられる。後円部においては、排水溝の曲折点より外域についての封土はそのほとんどが黒褐色のローム層で封ざされ、数箇所にブロック状に山土（和泉砂岩の風化土壌）が混入されていた。

- (3) 墳丘の完成は、第一次として後円部の石室の構築が行なわれ、次に後円部の完成が行なわれ、その後において前方部が行なわれたのではないかと考えられる。

玄室内部構造についての特質としては、第一石は軽に石材を利用しているのに対して、第2段からはすべて横積に利用していることに注目をしたと同時に、左壁、右壁と奥壁面において、玄室内の穹窿形とともにそれをささえているための支柱として特に奥行きのある自然石が用いられていた。また石材の利用については、横積みにおいて、奥行のあるしかも奥行に比重のある方法を取り構築されていることも、玄室技術に何等かの差を与えるものと見ている。

漢道部から玄室内部に使用された石質は、すべて和泉砂岩で統一されており、石材の奥壁に対する配慮はや、偏平な石材による調整がおこなわれているに過ぎなかった。

玄門の片袖部の石材は、実に調整され、しかも最下段から最上段まで横積みにされており、天井石の架構を容易にならしめていた。

ただ主体部および、排水溝にいたる石材はすべて和泉砂岩で統一され、しかも割石は使用されていないことも特筆すべき一つではなかろうか。また玄室内部はベンガラが塗布されていた。

遺物に対しての特筆すべきものは別にないが、特にガラス玉の出土が多く、後期古墳の一つの特徴かとも考えられる。

埴輪について

1、設置上の問題点、前方部前長を主体としての埴輪列であり、後円部暗部での埴輪列は確認されておらず、埴輪片の出土にとどまることである。埴輪の構築の上からも合せ考えられねばならない一要因があるようである。その一要因として土止めが考えられるが、や、その可能性は考えられる。たとえば、円筒埴輪の第2の凸帯の中間値まで粘土をつめていたものを確認しており、少なくとも第一凸体までは、すべてに共通するものであった。

2 主軸長の決定

前方部及び後円部の構築の末端部（兆域）を示すものとして、Fig 24図に布石を確認しており、この地点が前方部の構築の基準石としたものと推察している。この布石は前方部陵線部においても確認しているが、葺石とは考えられず、工程の目標石と見た。更に後円部においては、排水溝の先端部とやや同心円線上に数個の布石を確認した。後円部におけるセンターは、4mに位置したのに対して、前方部のセンターは3.25mになっている。以上のこととは、本墳造築時の基礎工程の一助とも考えられる。またこのことについては、排水溝の勾配にもうかがうことができ、排水効果を高めることになったと考えられる。この布石間距離を本墳の全長と見ての計測値は45.2mとなる。

3 2次の遺構（粘土塊）の工程は最終的段階ではなかったか。

本墳の築造の工程は明らかにされたのであるが、この工程を特に前方部と後円部の接合点（Fig 17の2や3）に求めるならば、後円部主体部の盤築の後、前方部の構築が行われた後で墳丘の調整をかねた工程として2次の遺構の意図的な工程がなされたものと考えた。この最終的な工程において特に玄室上の配石の持つ意味が解明できるかと思われる。更にこの粘土塊が暗部にやや位置することも祭壇跡としての機能を更に強くするものである。

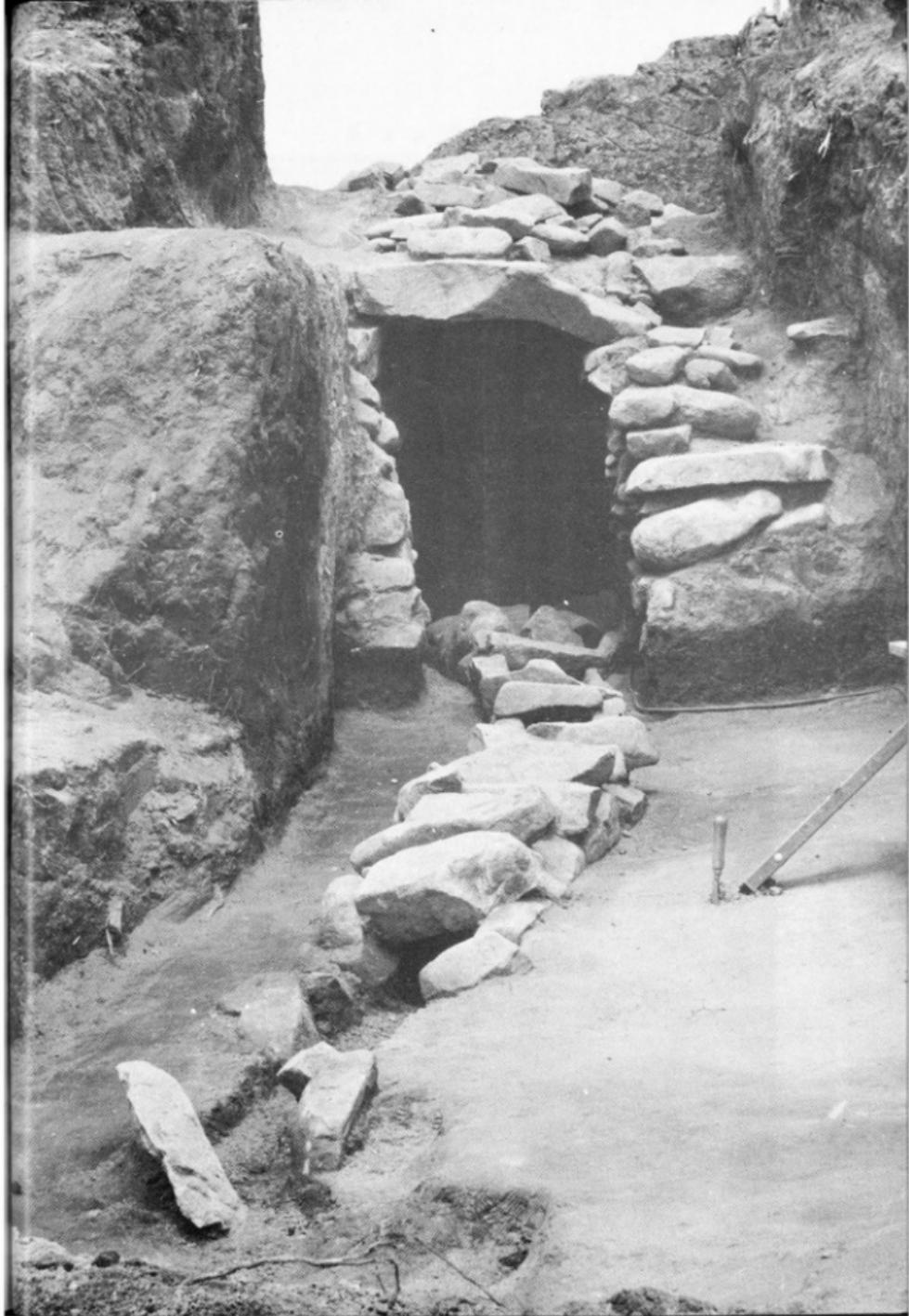
前述の主軸長の決定と同様に前方部前長をKトレンチの断面図におけるP点に求めた。前方部においては盤築が行なわれていないことより、土砂の流失は多くあるものと推察したのであるが、前方部陵線部での布石として計測した。その計測値は20mであった。

(4) 三島神社古墳をめぐる、前方後円墳の相異について

古墳名	主軸全長	主軸方向	前方部全長	後円部高	前方部高
三島神社	45.2m	N 23.5°W	20m	4m	3.25m
経石山	48.5m	W 0.2°N	20m	5m	3m
波賀部	54.0m	W 15.2°N	30m	6.66m	6.13m

以上の如き数値を計測しているが、今後の研究において明確にされることを希望し結語としたい。

序文でもふれたように、浅学のため数々の問題点を残して来たのであるが、幸いにも本墳を桑原八幡神社境内に主体部の復原が計画されており、この復原において更に研究を深めると共に、更に困難であろう発掘から復原への努力をしたい。



P L 2 古 墳 全 景



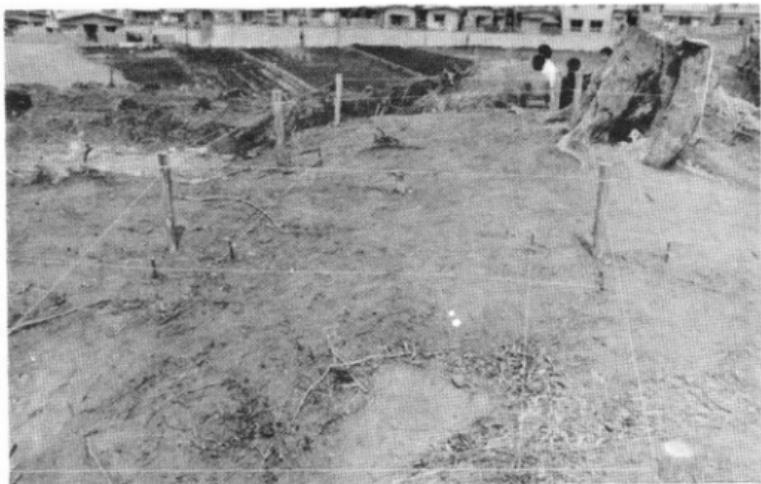
P L 3 台風十号（45年8月21日）直後の前方部 西南より



P L 4 伐採後 南側道路より（46年1月1日）



P L 5 グリット (後円部墳丘)



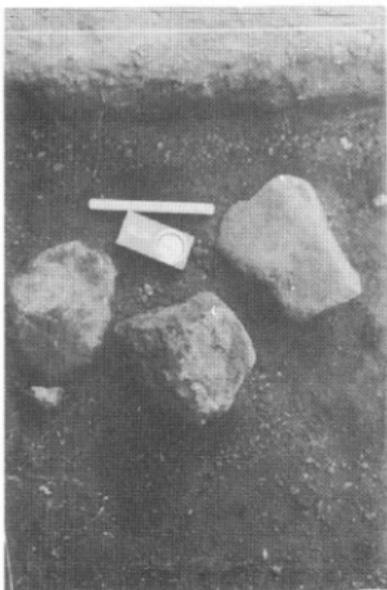
P L 6 ○トレンチ (基底部調査)



P L 7 あん部 (I トレンチ)



P L 8 二次遺構の配石



P L 9 土 試 器 (C 1 グリット出土)



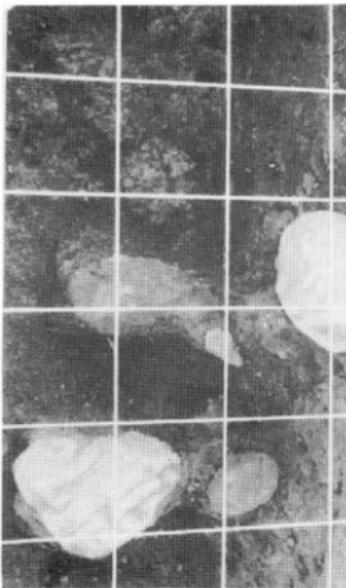
P L 10 二次遺構



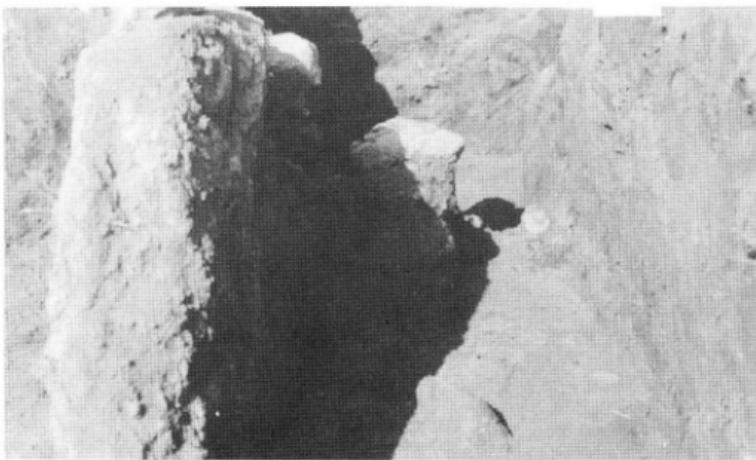
P L I I 玄室上部配合



P L I 2 A T グリット天蓋部



P L I 3 A · B , T のグリット発堀状況 Fig 6 の配石遺構



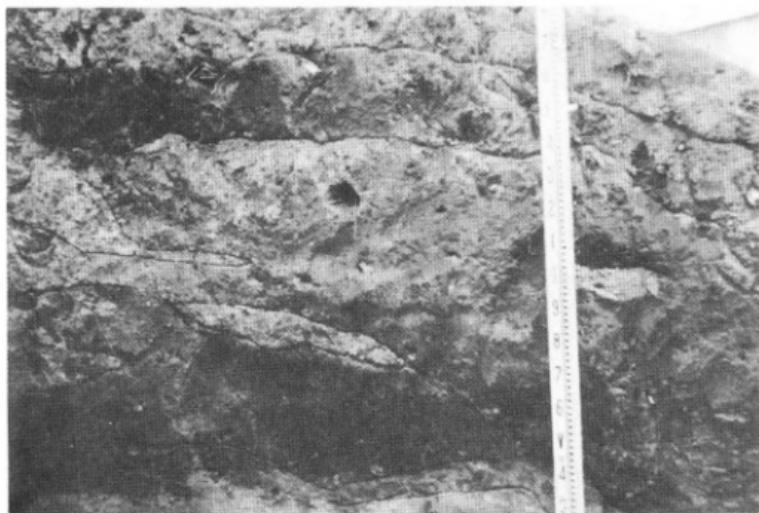
P L 14 C—C' 断面



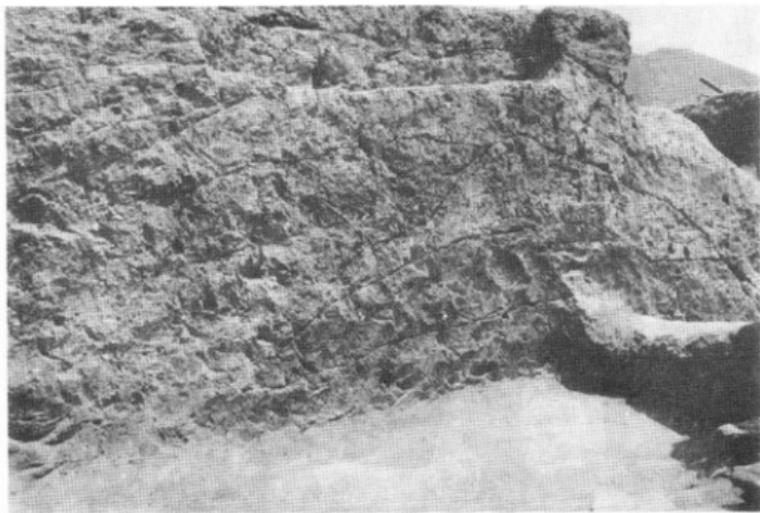
P L 15 E—E' 断面



P L 16 G—G' 断面



P L 17 G'-G' を南面より見る



P L 18 閉 塞 口



P L 19 玄室部の天井石 (天蓋石)



P L 20 天井石及び排水溝



P L21 玄室内部よりみた封鎖口



P L22 玄室内部よりみた天井石



P L 23 玄室内部の玉石



P L 24 玄室内部の発掘状況



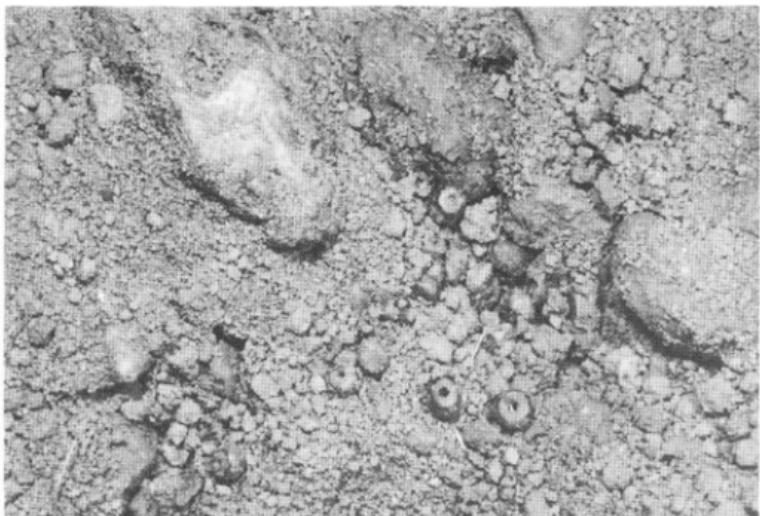
P L 25 落石を除去した床面



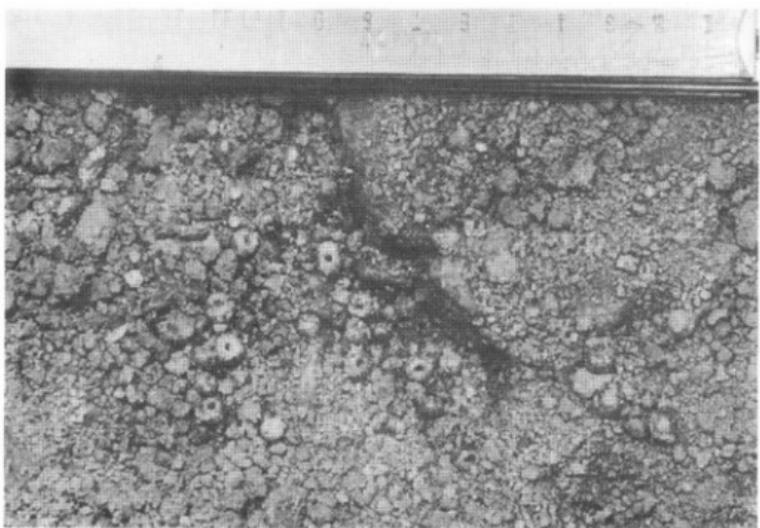
P L 26 須恵器（器台）の出土状況



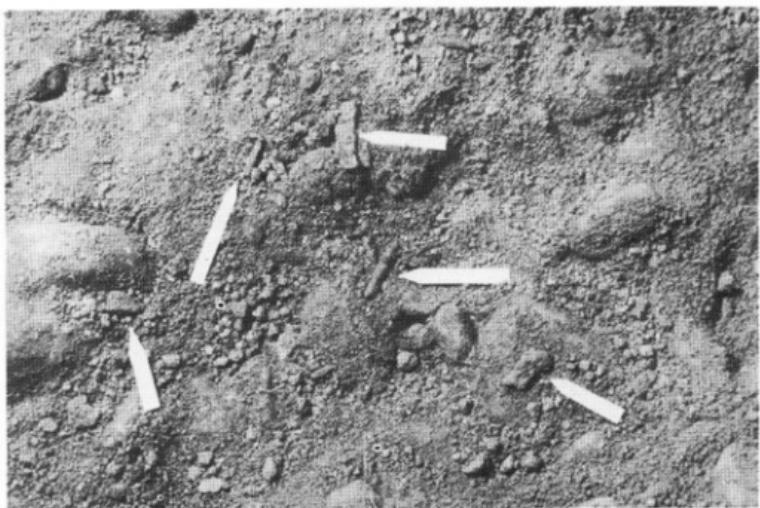
P L 27 ガラス玉の出土状況 №. 1



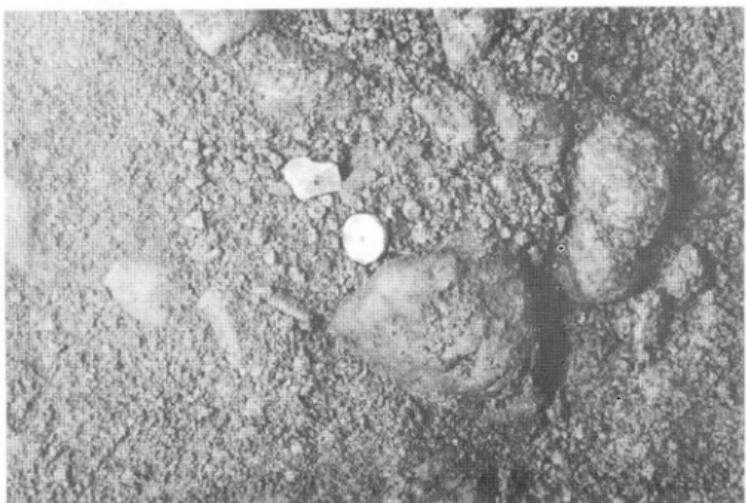
№. 2



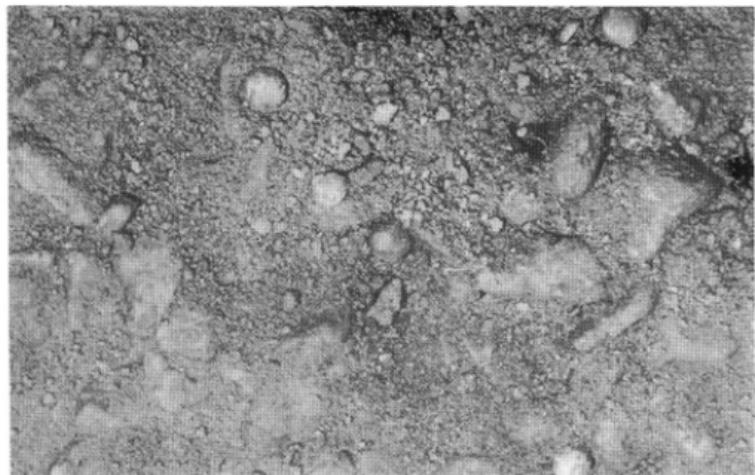
P L 28 铁器出土状况



P L 29 硼石製有孔石器の出土状况



P L 30 青銅製鈴の出土状況



P L 31 管玉の出土状況



P L 32 小玉連綴状出土状况



P L 33 床 面

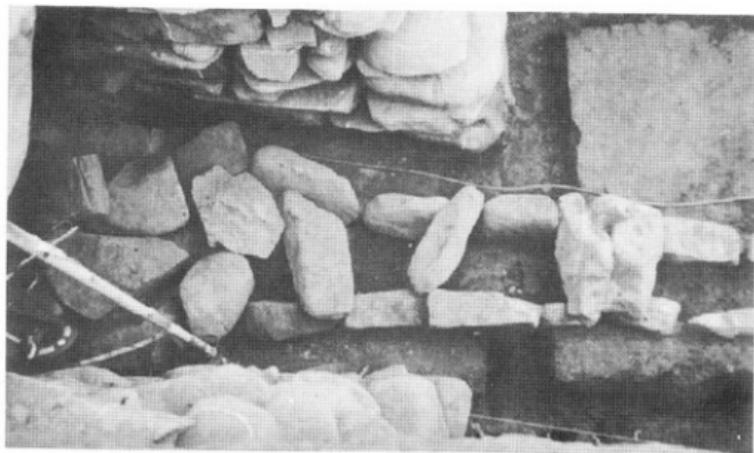


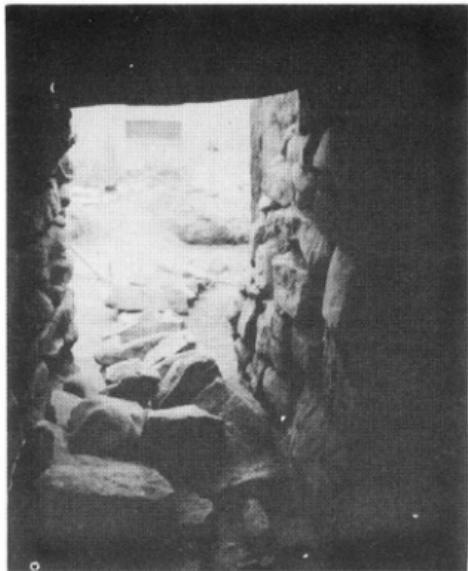
P L 34

蒸道口と排水溝



P L 35 排水溝の蒸道部分での構造

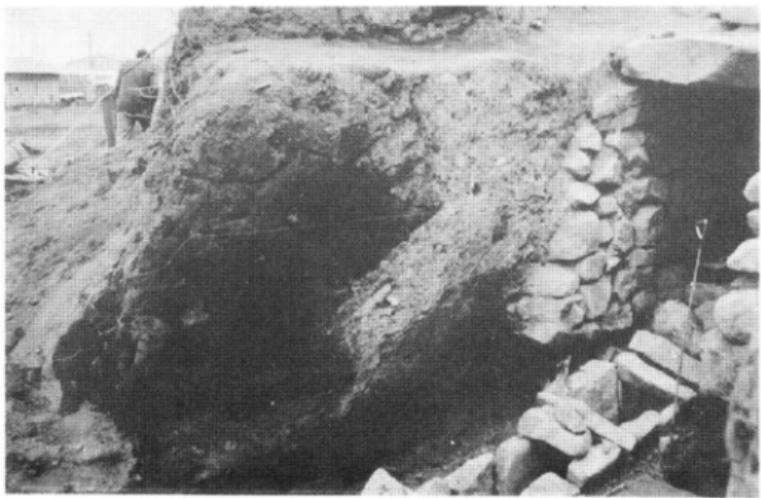




P L 36

玄室内からみた排水溝

P L 37 羹道付近の封土の状況



P L 38 墳輪出土状況 No. 1

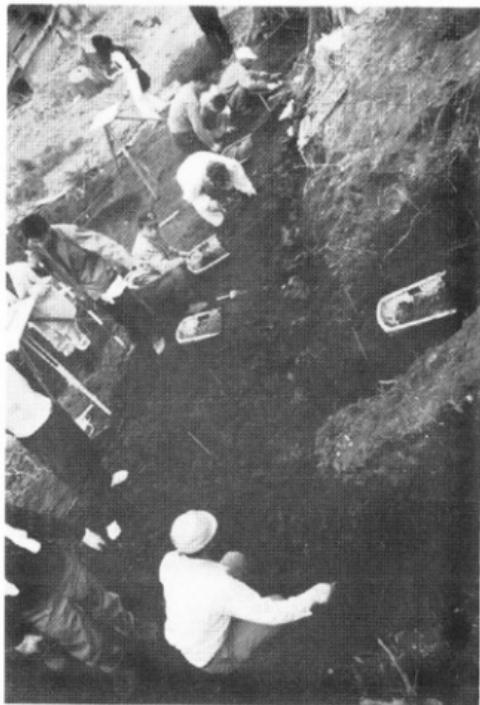


No. 2



P L 39

埴 輪 列 No. 1

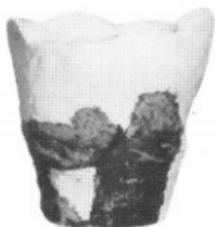


No. 2



No. 3





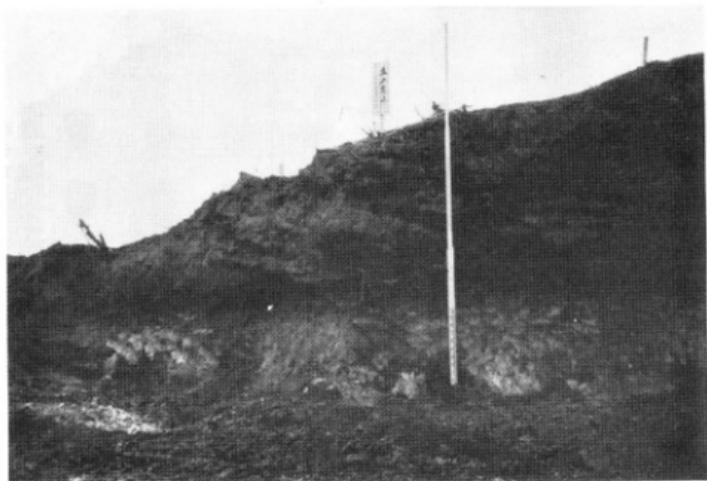
埴輪 No.2



埴 輪 No.3



P L 41 南方部の封土状況



P L 42 玄室奥壁



P L 43 玄室右壁



P L 44 玄室左壁



P L 45

玄室内部の割付け



P L 46

主体部解体作業

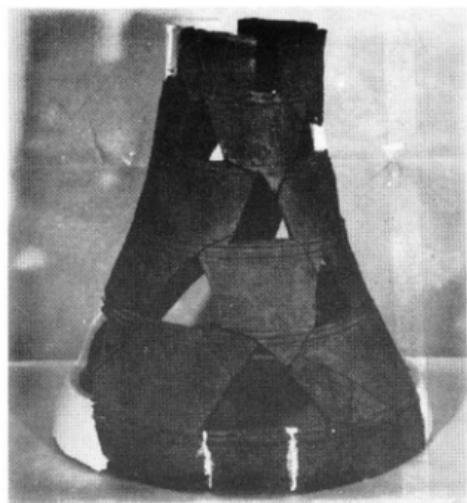


P L 47

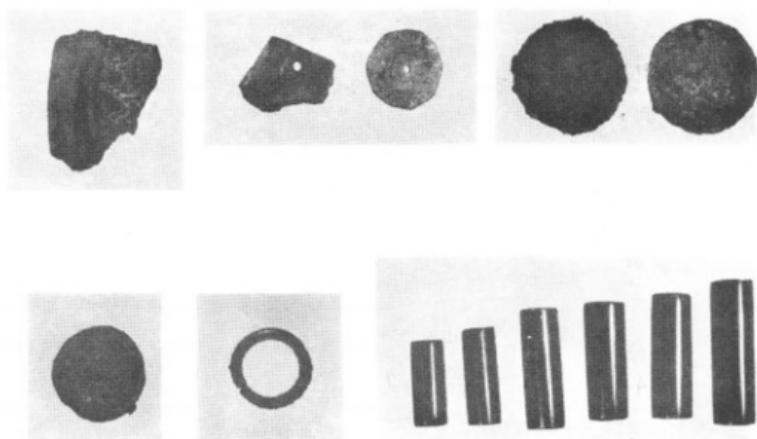
調査員（五月九日一七時）
消えゆく古墳の最後を見守る



P L48 器 台

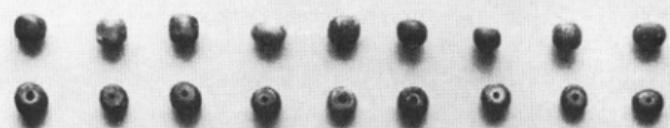


P L49 管玉ほか

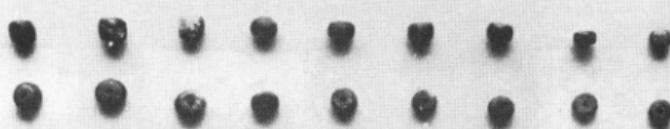


P L 50 玉類

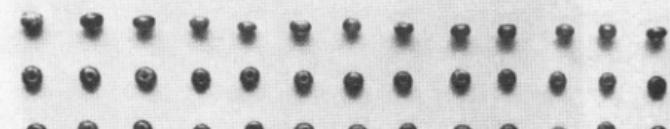
ガラス玉大



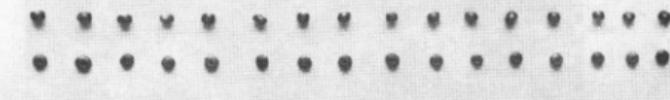
ガラス玉中



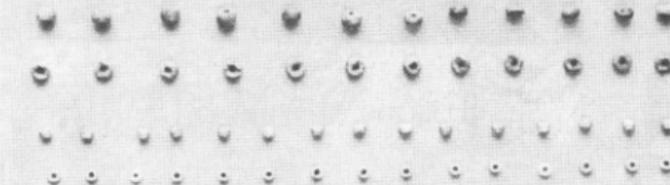
ガラス玉小



白玉大



白玉小

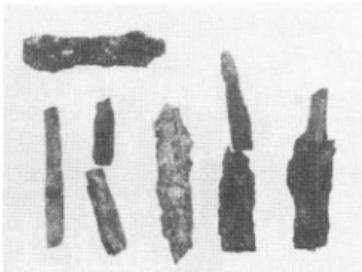
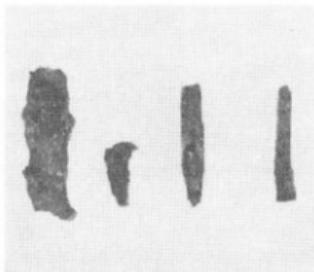
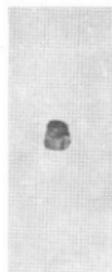
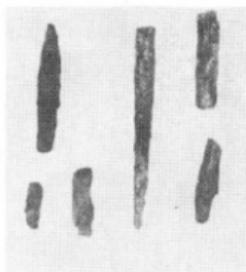
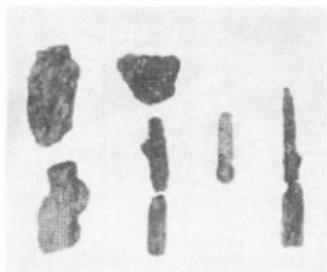


銀製空玉

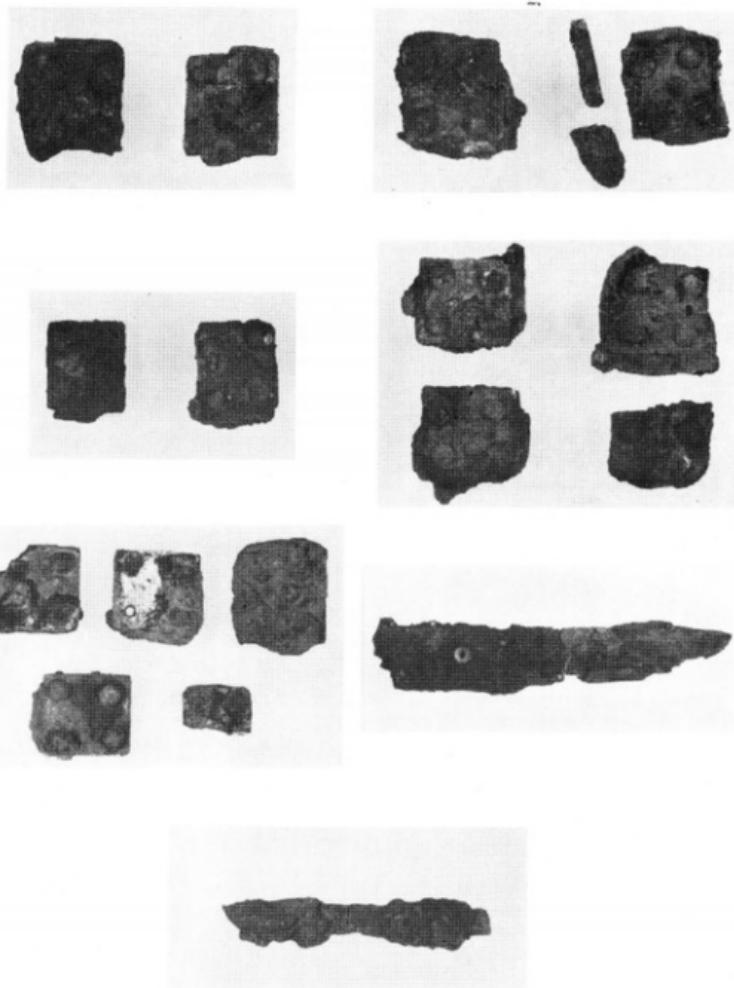


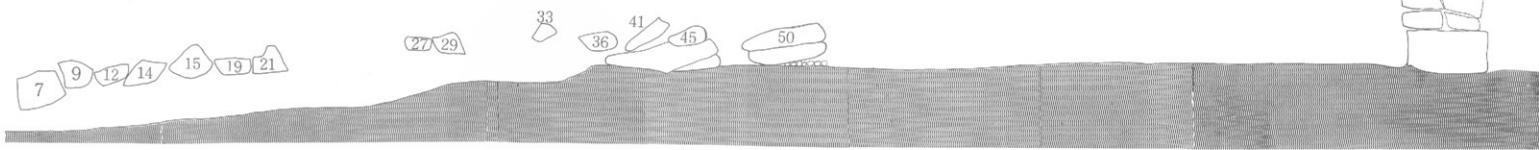
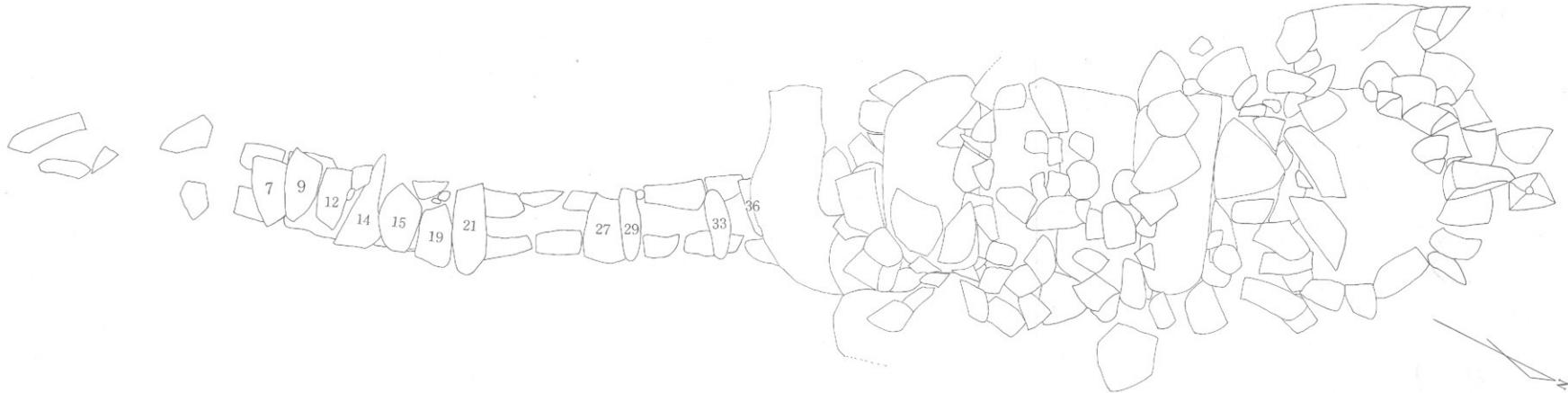
写真のみ 図なし

P L 51 鉄 器 類 と 歯 牙



P L 52 鐵地金銅張金具







文化財保護の世論を高めるためにも遺物の整理復原に力を注ぎ、整理復原を完了し、博物館もしくは考古館の設立の日まで、出土遺物は松山市立青少年センターに展示保管しております。時代と開発の波におされ消滅する文化財を守りたいものです。

三島神社古墳発掘調査報告書

昭和47年11月1日発行

編集・発行 松山市教育委員会

印刷所 松岡印刷株式会社

松山市山越三丁目5-35

電話 松山 (0899) 22-4171(代)